

公募テーマ：「産業構造審議会 教育イノベーション小委員会  
「中間とりまとめ」の論点の社会実装」に関するテーマ



教育現場における人口減少を背景とした人材不足を乗り越える

# 学校人材シェアリングプロジェクト

最終成果報告書

認定特定非営利活動法人カタリバ

## 担当者情報

所属・役職 : 認定NPO法人カタリバ  
氏名 : 起塚拓志 (オキヅカ タクシ)  
メールアドレス : t.okizuka@katariba.net  
電話番号 : 090-6876-5537

作成日 2024.02.22

1. 事業者
2. 背景と目指す姿
3. 実施体制・実証フィールド
4. 実証内容
5. 実証結果
6. 今後の自走・普及プラン
7. Appendix

2～7は

【オンライン相談室開発】

【小規模高校ネットワーク開発】

それぞれに掲載

## 事業者について

---

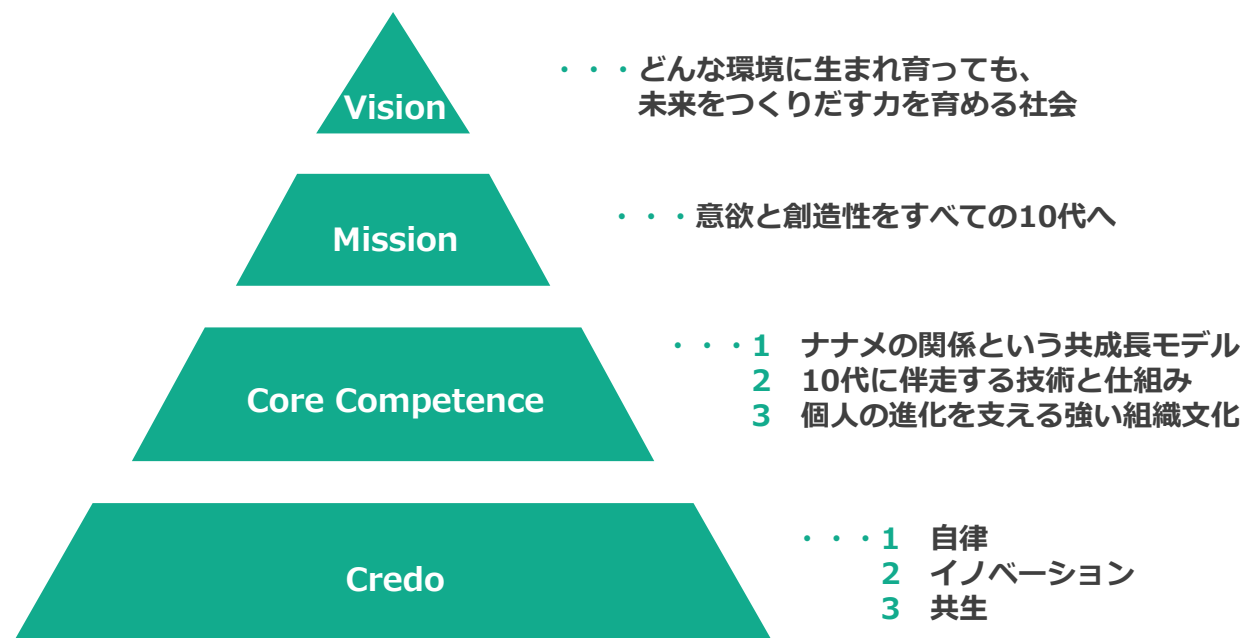
# NPOカタリバ：団体概要・団体理念

どんな環境に生まれ育っても未来をつくりだす力を育める社会を目指し、すべての10代が意欲と創造性を手にできる未来を実現しようと活動しています。そのため私たちは、活動の核となる3つの強みを磨き続けます。さらにすべてのスタッフが日々 credo に掲げた行動指針を実践することで、私たち自身が常に進化し、未来をつくる体現者であることを目指しています。

## 団体概要

名称	認定特定非営利活動法人カタリバ
本部	東京都杉並区高円寺南3-66-3 高円寺コモンズ
設立	2001年11月1日（2006年9月21日に法人格取得）
役員	代表理事：今村久美 常務理事・事務局長：鶴賀康久 理事：岡本拓也（公認会計士） 酒井穰（経営者） 中原淳（博士/人間科学） 山内幸治（若者創業支援NPO理事） 監事：神山晃男（経営者） 中山龍太郎（弁護士）
職員数	133名（2021年1月時点）
収入	1,231,270千円（2019年度）

## 団体理念



\* 団体理念は3年間、全職員でつくりたい未来・ありたい姿・何人の組織になっても大切にしたい行動指針について対話を重ねながら作成しました。

# NPOカタリバ：取り組むテーマと事業のかたち

すべての10代が意欲と創造性を育める未来を目指し、カタリバは2つのテーマを掲げ  
サードプレイス（居場所）運営、プログラム提供、学校や行政へのハンズオン支援などの活動に取り組んでいます。

## Theme 1

誰ひとり取り残さずに学びにつなぐ

生まれた環境による「キッカケ格差」を無くしていく

## Theme 2

未来をみずから切り拓く力を育む

日本中の子供たちに本物の「マイプロジェクト」を



1

### サードプレイス型事業

放課後や学校外の居場所として  
地域のニーズや課題に合わせた10代のための施設を運営



2

### プログラム提供型事業

学校や地域に10代の心に火を灯し  
意欲と創造性を育むプログラムを届ける



3

### ハンズオン支援型事業

高校・行政の中に入り込み、  
探究的な学びのサポートや、地域の教育環境づくりを実施

テーマ1

オンライン相談支援室の開発

---

## 実証の背景と成果

### 背景

教育現場でのリソース不足を背景として、生徒の困難をタイムリーに支えられていない。そのため、学校・行政ではない第三者にオンラインで相談できる場を確立し、リソース不足を補いつつ、課題の早期発見・解決が可能な環境を確立する

### 成果

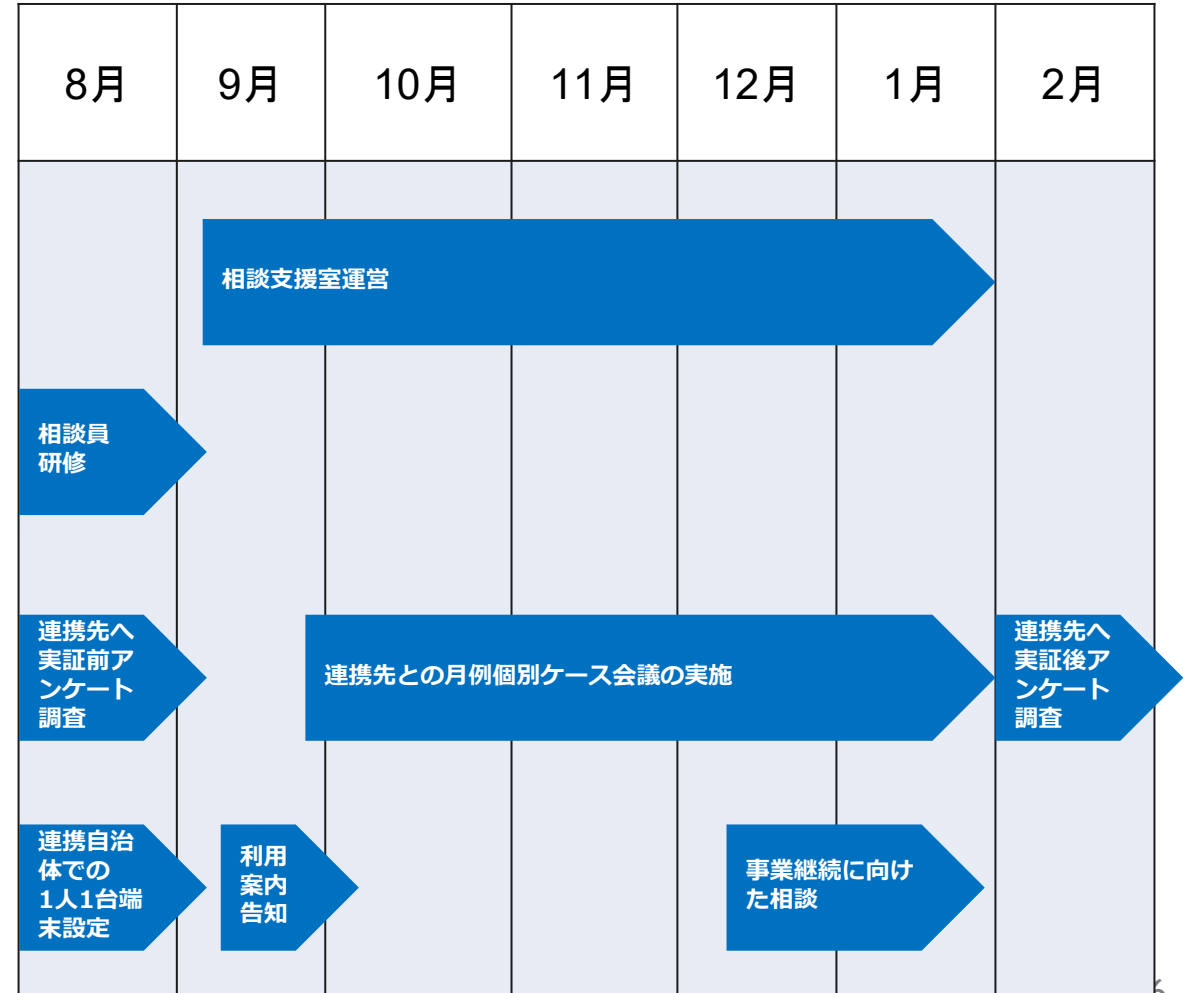
#### ①加賀市でのシェア型オンライン相談支援室の実装

- 学校側で把握していなかった**重大な懸念事案25件の早期発見**
- 児童生徒が重大な懸念事案の内容をチャットで話すようになるまで相談開始から**平均28日**かかることが判明
- 効果として**児童生徒の不安軽減、教職員の負担軽減**を測定
- 次年度以降の予算を**獲得**

#### ②次年度以降の自走・普及プランの策定

- 来年度、**県予算で配置されるSC・SSWの補完**を実証していく予定

## 実証内容



## 2. 背景と目指す姿

### 背景

小中高において長期欠席者（不登校）が急増しているが、欠席者へのケアを期待されるSSWの不足が常態化している

#### ① 配置時間不足・人員確保の困難さによる スクールソーシャルワーカーの不足

(8-9)スクールソーシャルワーカーの活動日数の状況(公立)

	中学校区		小学校		中学校		高等学校		計	
	中学校区数 (校区)	構成比 (%)	学校数 (校)	構成比 (%)	学校数 (校)	構成比 (%)	学校数 (校)	構成比 (%)	学校数 (校)	構成比 (%)
①常駐	94	1.0	79	0.4	68	0.7	10	0.2	157	0.5
②年間168日以上(常駐を除く)	552	5.9	395	2.1	254	2.7	6	0.1	655	2.0
③年間167日～84日	1,168	12.6	845	4.5	644	6.9	50	1.2	1,539	4.8
④年間83日～42日	1,689	18.2	1,986	10.5	1,262	13.5	196	4.8	3,444	10.7
⑤年間41日～20日	1,623	17.5	3,002	15.9	1,742	18.7	297	7.3	5,041	15.6
⑥年間19日～10日	948	10.2	2,535	13.4	1,129	12.1	278	6.8	3,942	12.2
⑦年間9日～1日	1,582	17.0	5,012	26.5	2,011	21.6	912	22.5	7,935	24.5
⑧年間0日(配置実績なし)	1,629	17.5	5,086	26.9	2,213	23.7	2,313	56.9	9,612	29.7
計	9,285	100.0	18,940	100.0	9,323	100.0	4,062	100.0	32,325	100.0

(注1)スクールソーシャルワーカーの雇用形態や配置計画に拘らず、活動日数の実績で計上したものを。

(注2)常駐とは、スクールソーシャルワーカーが単独の者が複数の者に拘らず、基本的に毎日、一人以上のスクールソーシャルワーカーが当該学校の相談業務等に従事しているものを。

(注3)中学校区とは、中学校別の通学区域であり、1つの中学校とその通学区域内にある複数の小学校を総称するものである。

(注4)高等学校の全定併置校や通信制併置校等においては、全日制、定時制、通信制それぞれ1校として別々に計上。

(注5)構成比は、各区分における学校数に対する割合。

### 目指す姿

あるべき姿：登校に困難を抱えたとき、  
 早期に最適な支援先につながる事ができる

リソースシェアリング実証①  
 オンラインによるSSW（相談支援機能）の共有

約7割の学校で  
 SSWの活動が不  
 足している

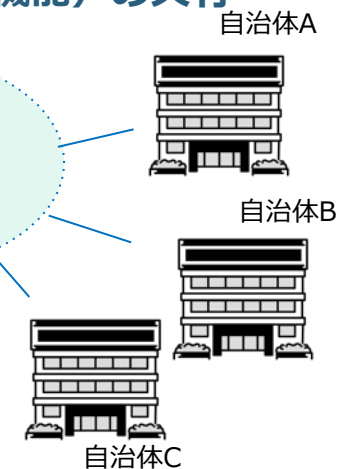


早期接続



伴走型相談支援機能

子どもとその保護者



計  
 66.4  
 %

出典 | 文部科学省 令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果



## 3. 実施体制・実証フィールド

### 実施体制

事業受託者：認定特定非営利活動法人カタリバ

- 統括責任者：今村久美
- 執行責任者：瀬川知孝・菅野祐太
- 渉外担当：起塚拓志

再委託先

- 藤井理夫（オンライン相談支援室開発 / 丸日本(株)）
- 芳岡千裕（相談員採用・マネジメント/個人事業主）

### 実証フィールド

1、シェア型オンライン相談支援室の開発

- 石川県加賀市(小学校18校・中学校6校)
- 東明館中学校・高等学校（佐賀県基山町）

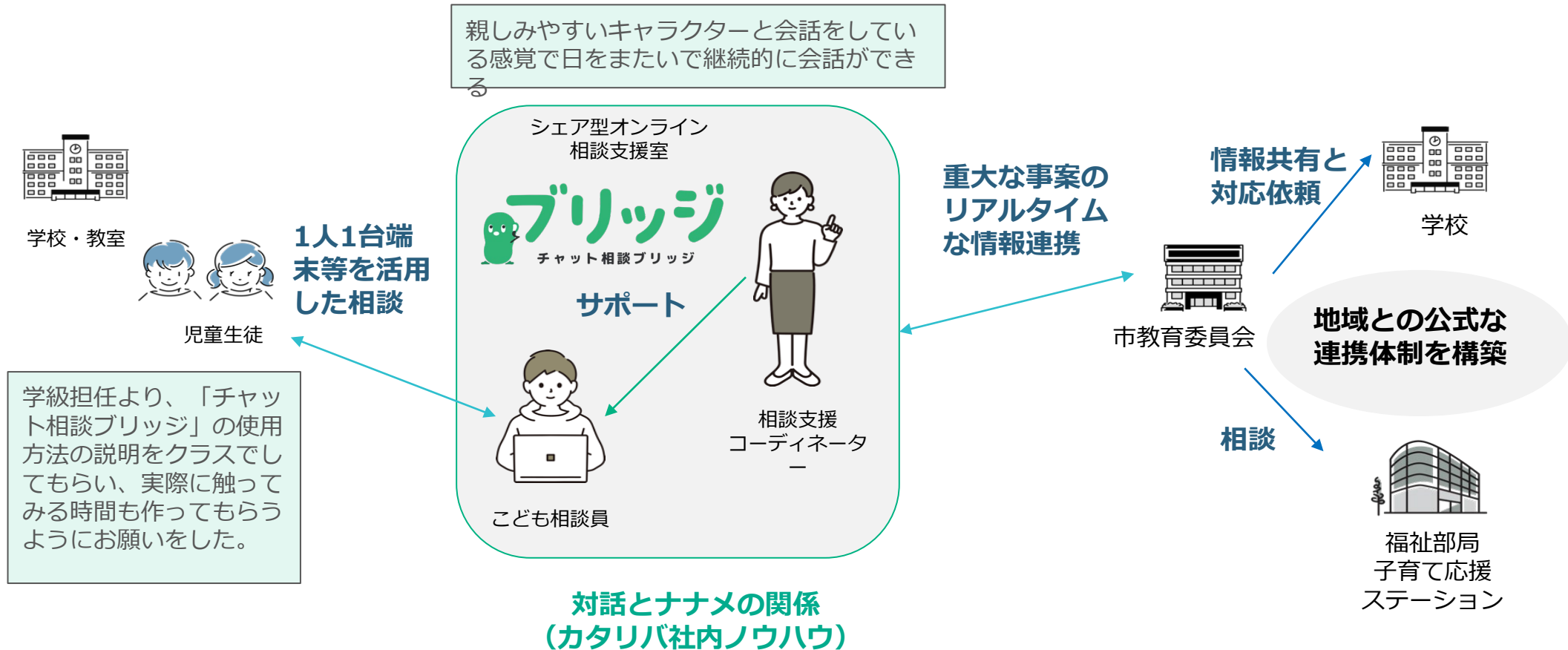
## 4. 実証内容概要

項目	狙い	取り組み内容
①子どもの課題を早期発見する	児童生徒が悩みを相談することのハードルを下げる	加賀市) 1人1台端末に相談システムにアクセスできるショートカットを作成。 東明館) 学校ポータルサイトに相談システムにアクセスできるリンクを設置。
	児童生徒とナナメの関係性を構築することで長期的な相談関係を維持	「こども相談員」として児童生徒へのオンライン伴走支援の経験があるユースワーカーを採用し、「対話の継続」を目標に設定したチャット対応を実施。
②保護者相談のアクセス改善	保護者が思いついたときに相談ができる環境を整備する。	LINEから簡単に保護者から相談を行えるようにし、学校からのメールや、学校ポータルサイトを通じて周知。
③地域連携体制の構築	児童生徒の抱える課題を周囲の大人が早期に把握する。	加賀市・東明館) 月次報告・緊急事案報告 加賀市) 個別事案共有シートの運用

## 4. 実証内容詳細①子どもの課題を早期発見する

### 実証のポイント

1. 教育委員会・学校側と連携し、子どもたちの相談支援室利用のハードルを下げる
2. 児童生徒と年齢の近い「こども相談員」による本人の気持ちに寄り添った相談支援を実施



目的：カタリバ社内ノウハウを活用し見過ごされがちな「こどものSOS」のキャッチに挑戦

## 4. 実証内容詳細①子どもの課題を早期発見する

### 実証のポイント

#### 1. 教育委員会・学校側と連携し、子どもたちの相談支援室利用のハードルを下げる

- ギガ端末ホーム画面に相談窓口のアイコンを常時表示
- 学級内でのお試し利用

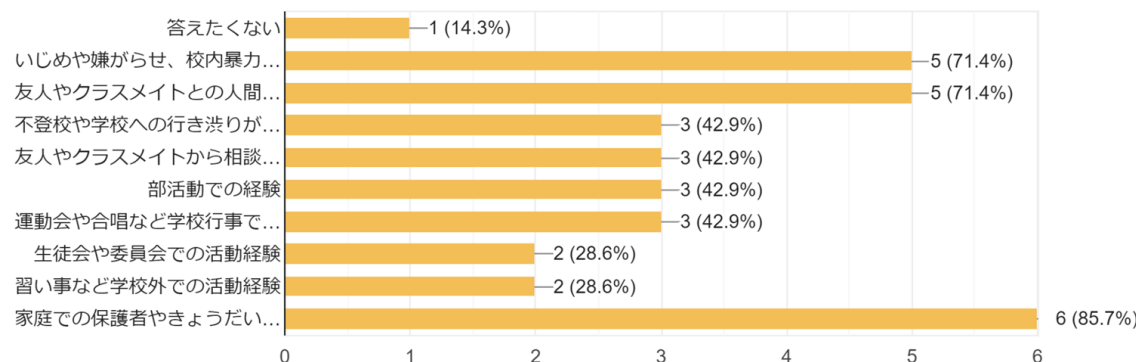
学級担任より、相談窓口のID登録方法を案内し、学級内の時間を使ってお試し利用

※東明館学園では、個人端末を利用しているため、ホーム画面へのアイコン設置はできず、学校ポータルサイトへのリンク設置となった。

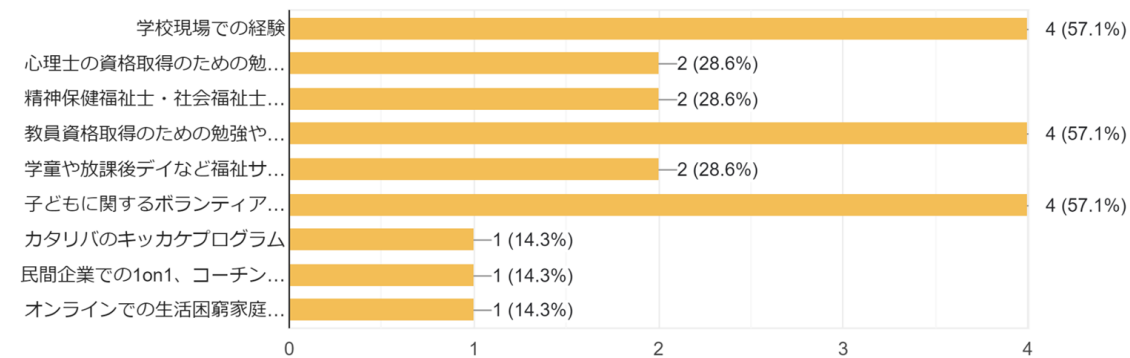


#### 2. 児童生徒と年齢の近い「こども相談員」による本人の気持ちに寄り添った相談支援を実施

相談対応において、あなたが役立ったと思う自分...についてあてはまるものをすべて選んでください。  
 7件の回答



相談対応において、あなたが役立ったと思う自分...についてあてはまるものをすべて選んでください。  
 7件の回答

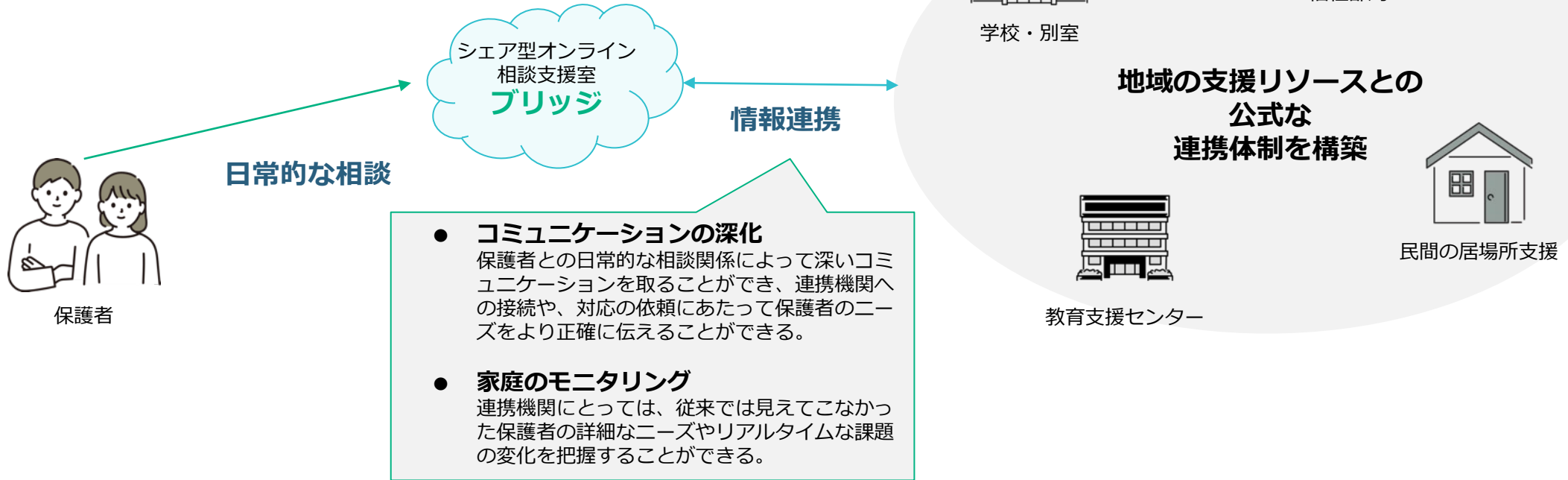


**ステップアップの機会提供：1名の「こども相談員」が、非常勤で小学校教諭として就職することになりました。**

## 4. 実証内容詳細②保護者相談のアクセス改善

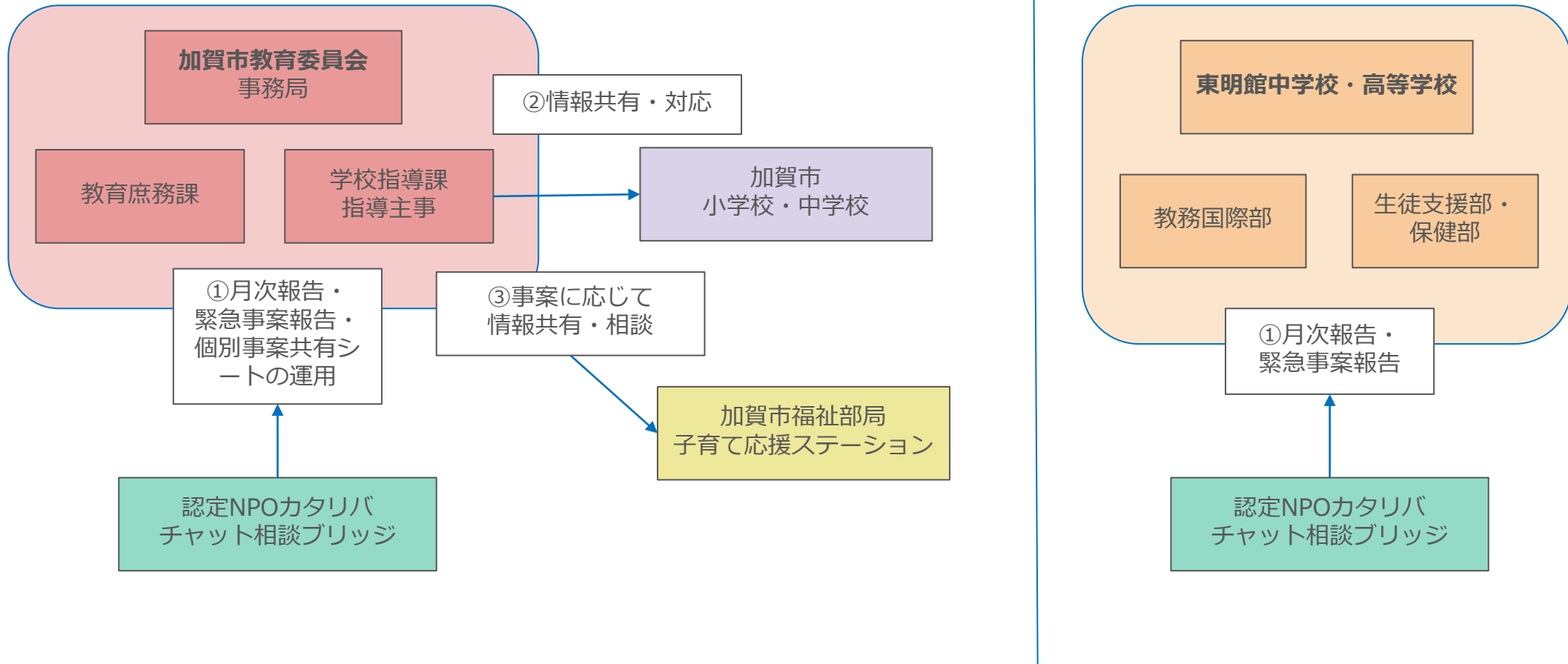
### 実証のポイント

1. 保護者がLINEから簡単に相談にアクセスできるようにする
2. 地域リソースとの連携によりスムーズな接続を図る



目的：保護者と支援機関の双方が直接的なコミュニケーションでは得られなかった情報を獲得できる。

## 4. 実証内容詳細③地域連携体制の構築



目的：相談対応により集まった懸念事案に関する情報を速やかに教育現場へフィードバックする体制の構築

### チャット相談ブリッジ ログイン

ようこそ。ニックネームとパスワードを入力して、ログインしてください。

はじめて相談をするときは、ユーザー登録をします。

ユーザー登録は、ピンク色のボタンからできます。

 **ログイン**

ニックネーム

パスワード

**ログイン** >

まだ登録していない方は [こちら](#) >

- **相談者の特定を容易にすることで、相談者の安全を第一に行動ができる仕組みづくり**

この仕組みがなければ、警察にネットワーク情報から照会をかけて特定を行う必要があり、生命に危険の及ぶような事案でしか、機能しなくなってしまう。

ユーザー登録で必要になるニックネームを学校から配布しているメールアドレスを設定するように学校から指導をもらった。

(個別事案の共有フロー)

- ①【チャット相談ブリッジ】リスクのある事案を認識し、【加賀市教育委員会】または【東明館学園】に事案の内容とそれに紐づくメールアドレスを連絡。
- ②【加賀市教育委員会】または【東明館学園】においてメールアドレスから、児童生徒を識別し、【学校現場】へフィードバック。
- ③【学校現場】で、相談内容に触れることのないように注意をしつつ、配慮をした対応を行う。  
【チャット相談ブリッジ】では、児童生徒に継続的な関わりを持つことを目的として、チャットを継続。

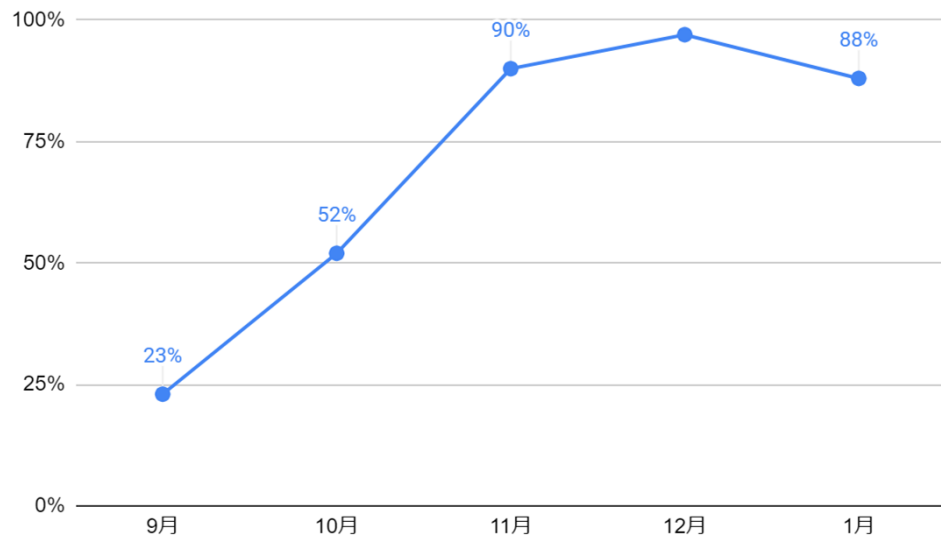
## 5. 実証結果概要

項目	結果
<p>①子どもの課題を早期発見する</p>	<p>こどもを取り巻く課題やその兆候の早期発見につながる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ブリッジに寄せられた相談事案のうち、特に懸念される事案として抽出したもののうち71件が学校で把握していない事案だった。そのうち25件の重大事案について相談開始から、事案の把握にかかるまでの日数を調査したところ、平均28.04日かかることがわかった。</li> </ul> <p>こどもの不安感や孤独感が軽減される。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>相談後のアンケートで78.9%が相談前の不安な気持ちがポジティブに変化したと回答した。</li> </ul> <p>こどもの早期支援につながる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>家族関係の悩みを相談していた事案で、学校と連携して対応することで、先生に対しても悩みを打ち明けることができた。</li> <li>危険物の持ち込みに関する事案で、学校で持ち物検査を実施し、危険物の回収につながった。</li> </ul>
<p>②保護者相談のアクセス改善</p>	<p>保護者の相談から支援につながるまでの時間が短縮される。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ブリッジが間に入って福祉部局とのやり取りを代行したことにより、保護者にとって福祉部局へ相談することのハードルが下がり、その後は、保護者が福祉部局と直接つながれるようになった事例があった。</li> </ul> <p>地域の支援リソースの利用が促される。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>子どもの居場所を求める相談で、地域のフリースペースを紹介した事例があった。</li> </ul>
<p>③地域連携体制の構築</p>	<p>加賀市で実施した連携前と連携後のアンケートにおいて、「教職員の児童生徒対応において一部、負担軽減につながる」と回答した人数が増加した。 (連携前) 4名 (13.3%) → (連携後) 7名 (41.2%)</p> <p>実証で明らかになった課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>情報提供を受けた学校は相談内容をもとに直接的な対応を取ることが難しくジレンマを抱える。</li> <li>学校現場からみるとチャット相談でどういう対応をされているか見えづらいという懸念があがった。</li> <li>日常的に先生にチャットで相談できる環境があり、個人端末のため、ホーム画面にチャット相談のアイコンを設置できなかった東名館学園では、相談があまり寄せられなかった。</li> </ul>



## 5. 実証結果詳細①子どもの課題を早期発見する

ブリッジ利用 リポート率 ( [2回目以降の相談の事案数] / [新規事案件数] )



●実際に相談のあったユニーク数  
 月平均 268件

	9月	10月	11月	12月	1月
全体	510	345	179	142	165
加賀市	502	286	177	139	165
佐賀県	8	59	2	3	0
加賀市授業日数	20	21	20	16	17

### ● 継続利用者が多い。オンラインの”居場所”としての機能

相談の多くは、大人の介入を望まない、聞いてほしい・寄り添ってほしい



#### <市教育委員会や学校との情報共有の基準>

(チャット相談ブリッジ)

相談対応の中で、少しでも児童生徒の様子を注意深く見守った方が良いと考えられる事案について、事案共有用のシートに入力をして、市教育委員会に情報共有。

上記の事案の中で、「**希死念慮、いじめ、虐待、暴力、犯罪、危険物、不登校**」などが懸念される事案には「**フラグ**」をつけて管理。

さらに児童生徒の安全が脅かされるような**事態が切迫**している可能性があるものを**緊急通報**として、電話とメールで市教育委員会へ随時報告を行った。

(市教育委員会)

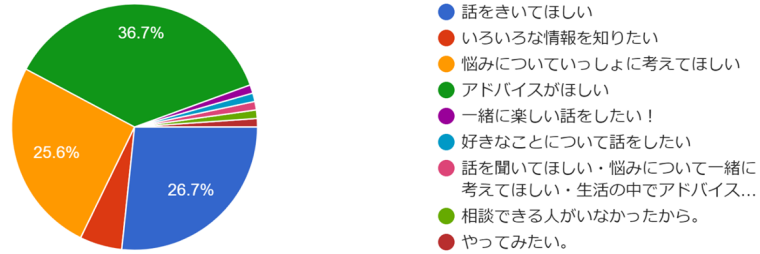
ブリッジで上がった事案について、メールアドレスから当該児童生徒を特定し、児童生徒の安全を優先する目的で、**学校へ相談内容を共有すべきか判断**をした上で、連絡を行い、現場での対応を依頼。

(学校)

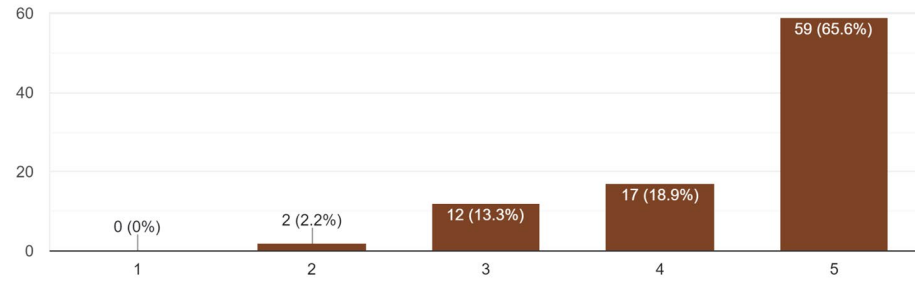
相談内容に触れずに児童生徒の見守りや必要に応じて面談などの対応。

# 5. 実証結果詳細①子どもの課題を早期発見する

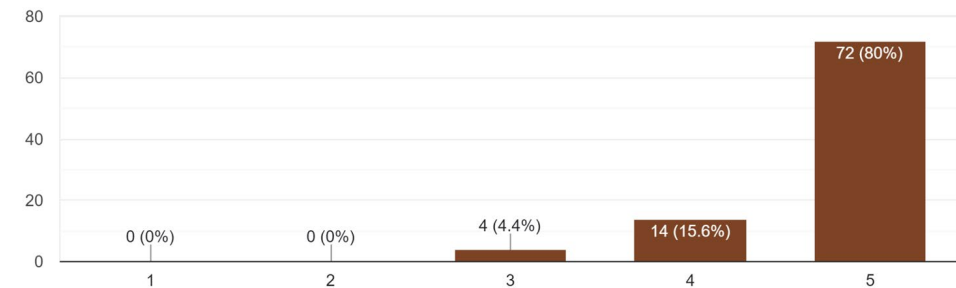
相談（そうだん）した目的（もくてき）を一つえらんでください。  
90件の回答



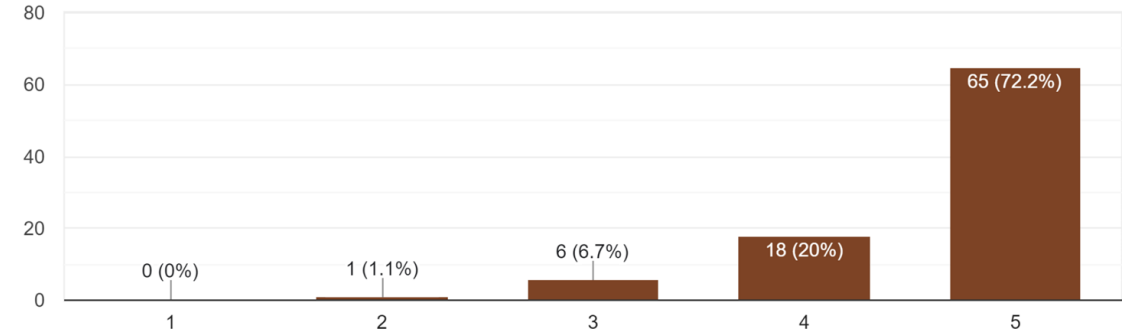
相談には満足（まんぞく）しましたか？  
90件の回答



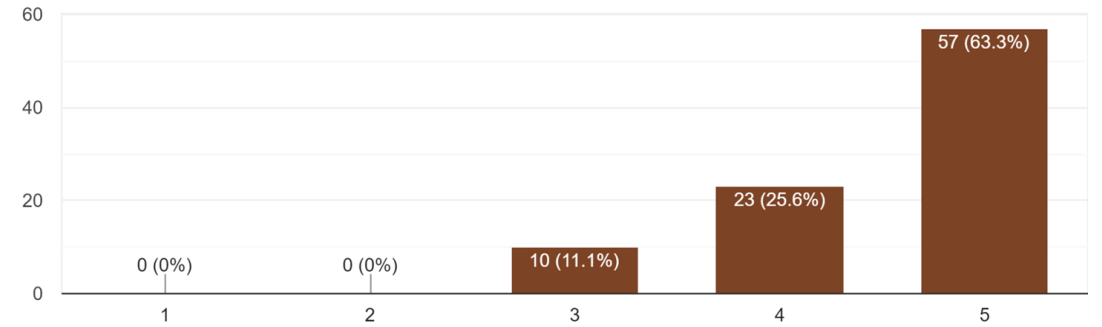
チャットの相談はしやすかったですか？  
90件の回答



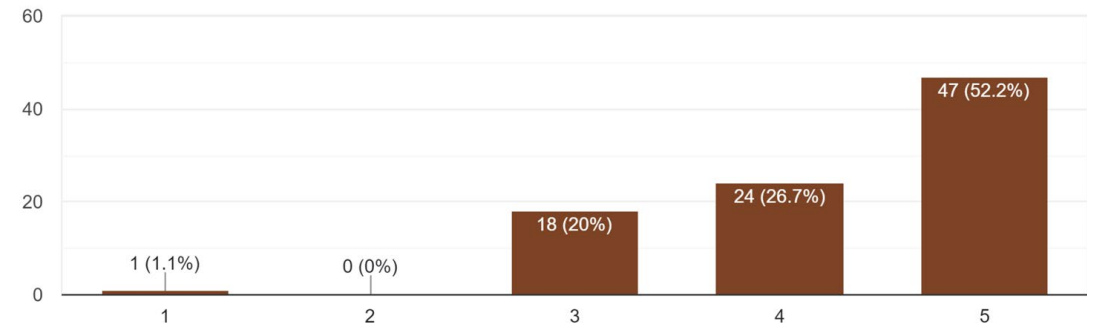
相談員（そうだんいん）の返事（へんじ）に納得（なっとく）できましたか？  
90件の回答



相談する前にくらべて前にすすめた、または前にすすむことができそうと思いますか？  
90件の回答



相談前のふあんな気もちが変わりましたか？  
90件の回答



## 5. 実証結果詳細①子どもの課題を早期発見する

### ● 相談のジャンル

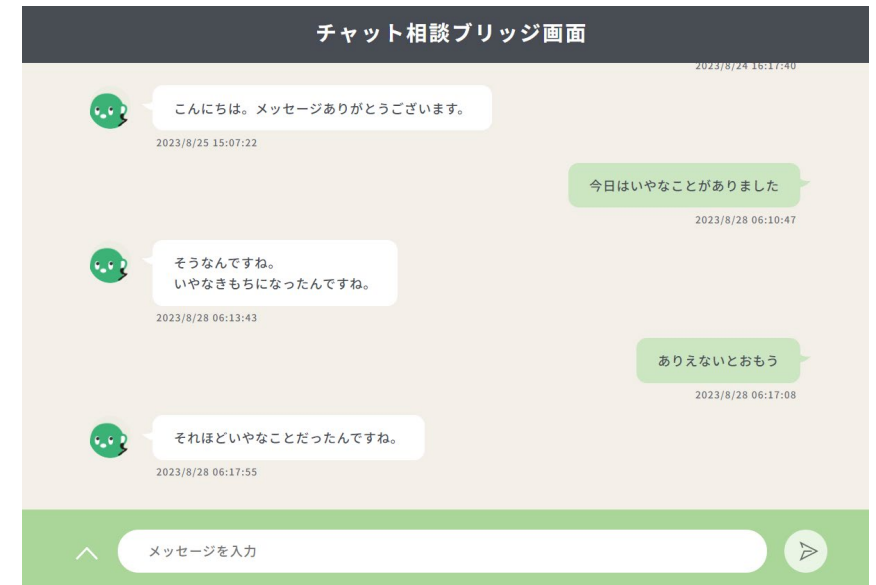
子ども間	33%
雑談	31%
勉強や教科、運動	11%
自分	7%
学校	6%
健康	3%
安全	3%
大人子ども間	2%
家の人	3%
ネット	1%
その他	0%

### ● 登録者数 1134人／5000人

小1	7	1%
小2	89	8%
小3	92	8%
小4	158	14%
小5	185	16%
小6	106	9%
中1	188	17%
中2	131	12%
中3	127	11%
高1	33	3%
高2	11	1%
高3	7	1%
計	1134	100%

### ● 画面イメージ

#### 「キャラクターとチャットしている感覚」

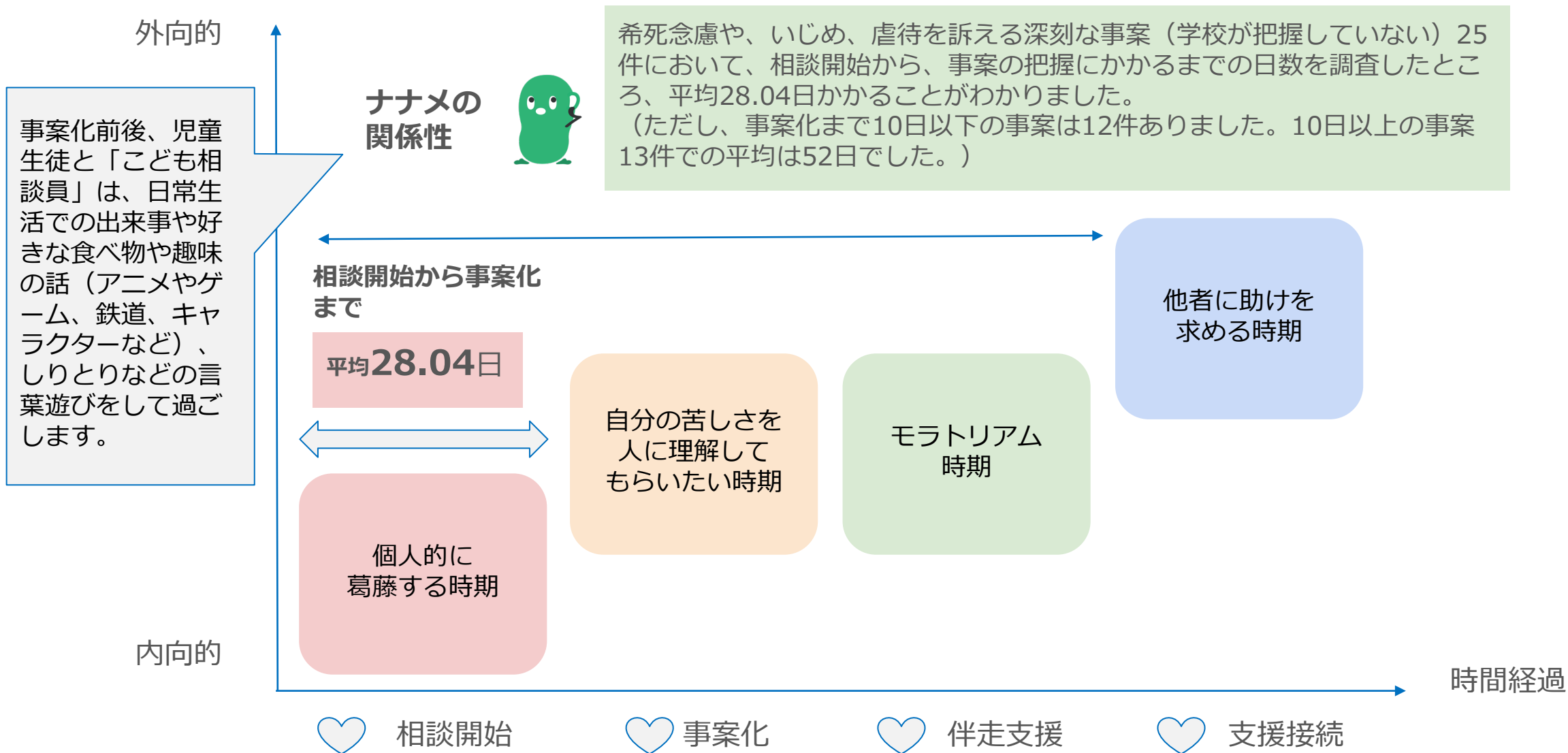


#### <課題の早期発見>

【東明館】1件：SCにも相談していた事案で健康上の悩みがあり、学校側に対応を要請し、医療機関の受診につながった。

【加賀市】102件を抽出し、うち71件は学校で把握していない事案の発見であった。希死念慮、いじめ、虐待、不登校など特に懸念される事案は25件確認された。また、危険物の持ち込み事案については学校での持ち物検査により回収につながった。

## 5. 実証結果詳細①子どもの課題を早期発見する（雑談の効用）



## 5. 実証結果詳細②保護者相談のアクセス改善

### ●相談のジャンル

健康	11%
発達障害や疑い	11%
接し方	17%
健康	11%
メンタル不調	11%
進路	6%
家計	6%
スクリーンタイム(スマホ・ゲーム・SNS)	11%
分からない、できない、追いつけない、ついていけない(能力的)	6%
不登校	11%
	100%

### ●実際に相談のあったユニーク数

月平均 7件

	9月	10月	11月	12月	1月
全体	20	8	6	2	2
加賀市	16	5	6	1	2
東明館	4	3	0	1	0

#### <支援につながるまでの時間短縮>

【加賀市】1件の児童生徒の健康に関する事案で、福祉部局「子育て応援ステーション」との連携で得た情報を保護者へ提供した。その後のフォローアップで、自ら「子育て応援ステーション」の電話相談を活用していることを確認した。

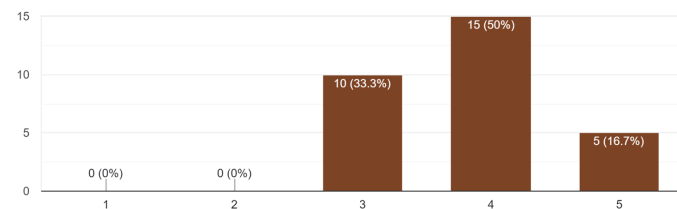
## 5. 実証結果詳細③地域連携体制の構築（加賀市）

加賀市の市教育委員会事務局、教育総合支援センター、学校（小・中・高）、福祉部局に実施した事前・事後アンケートより

期待  
(事前)

N=30

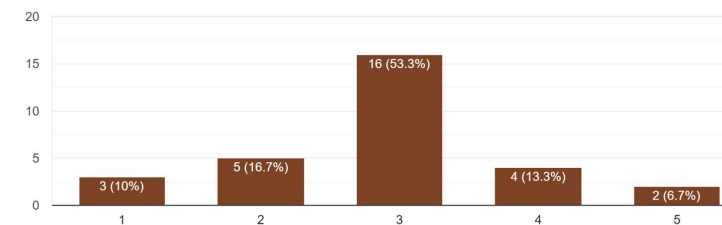
児童生徒向けチャット相談についてどの程度、期待していますか？  
30件の回答



不安  
(事前)

N=30

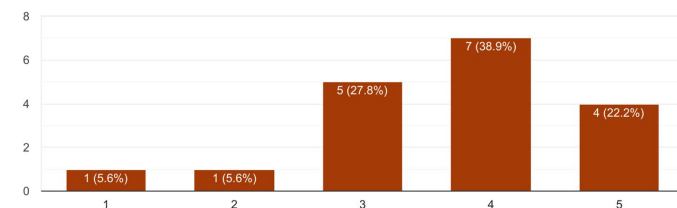
児童生徒向けチャット相談についてどの程度、不安がありますか？  
30件の回答



成果  
(事後)

N=17

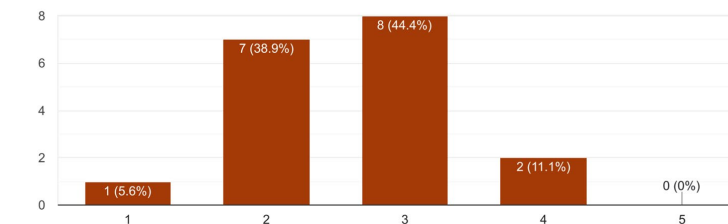
児童生徒向けチャット相談についてどの程度、成果を感じていますか？  
18件の回答



懸念  
(事後)

N=17

児童生徒向けチャット相談についてどの程度、懸念がありますか？  
18件の回答



- 「教職員の児童生徒対応において一部、負担軽減につながる」と回答した人数  
(連携前) 4名 (13.3%) → (連携後) 7名 (41.2%)

- 個別事案共有について「想定外の児童生徒についての事案」5名 (55.6%)

「以前から注意を向けていた児童生徒の把握していなかった事案」4名 (44.4%)

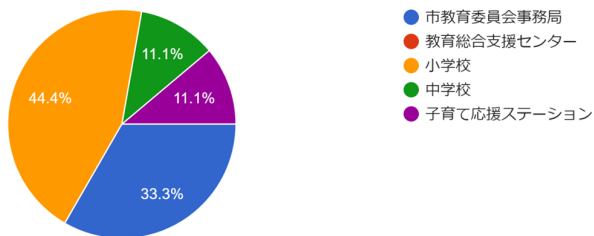
- 懸念として「どんな相談対応がされているかわからない」との回答が小学校と中学校から15名 (100%) 寄せられ、学校現場への説明の必要性が課題として明らかになった。

現場での負担軽減や期待に応えられるものの、オンラインでの対応状況が見えない所に現場不安が残る

# 5. 実証結果詳③地域連携体制の構築（加賀市）

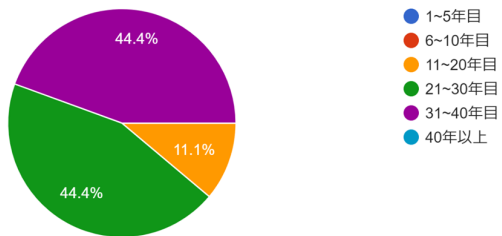
あなたの所属先を選んでください。

9件の回答



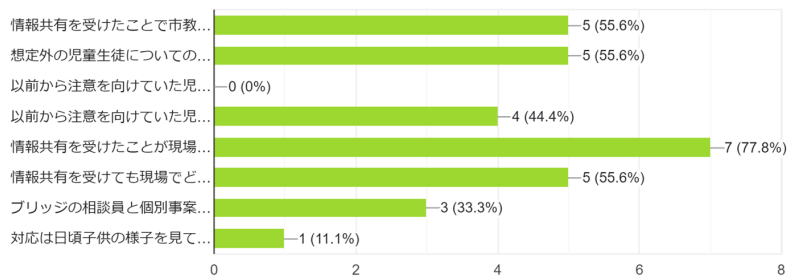
あなたの勤続年数を教えてください。

9件の回答



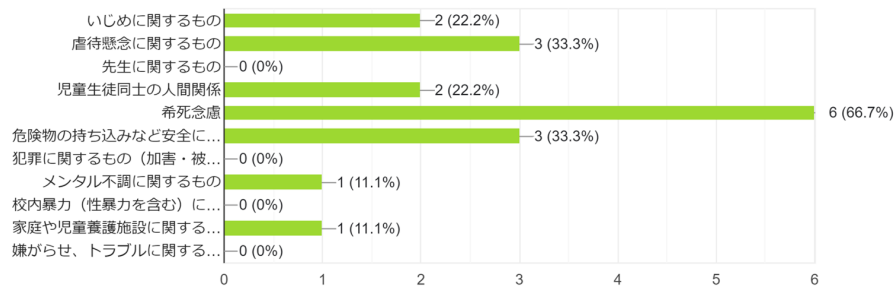
個別事案の情報共有について当てはまるものを選んでください。（複数選択可）

9件の回答



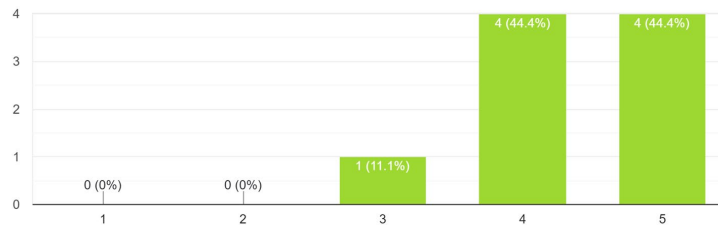
情報共有を受けた個別事案の内容について当てはまるものを選んでください。（複数回答可）

9件の回答



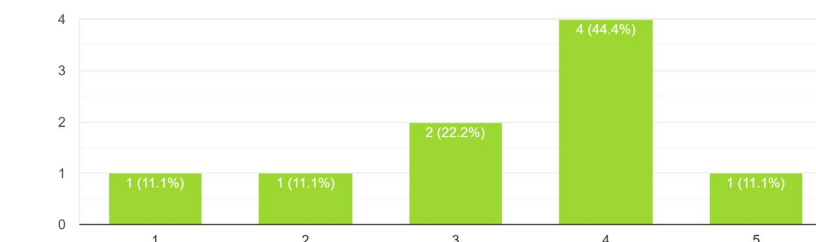
個別事案の共有についてどの程度、現場で役立っていると感じますか？

9件の回答



共有される個別事案のリスクレベルについてどのように感じていますか？

9件の回答



思いもよらぬ生徒であり、その後の欠席に敏感になった。（発熱ではあったが・・・）  
 情報共有の後、しばらく当該生徒を観察するなど、様子を見ることができた。  
 授業中の発信であることとその後の返信がないことなどから、本人以外のいたずらも考えられるが、希死念慮ということもあり、積極的な情報共有は助かった。  
 その後、本人に大きな変化は見られない。

普段からよく保健室を利用する生徒とか学校の生活アンケートに相談をよせてくる生徒であれば、情報はつかみやすいが、今回のような場合があると考えると、チャットブリッジの存在はありがたいと感じる。



## 6. 今後の普及・自走プラン

### ① シェア型オンライン相談支援室の開発

#### ■ 事業展開の方向性：自治体連携を拡大

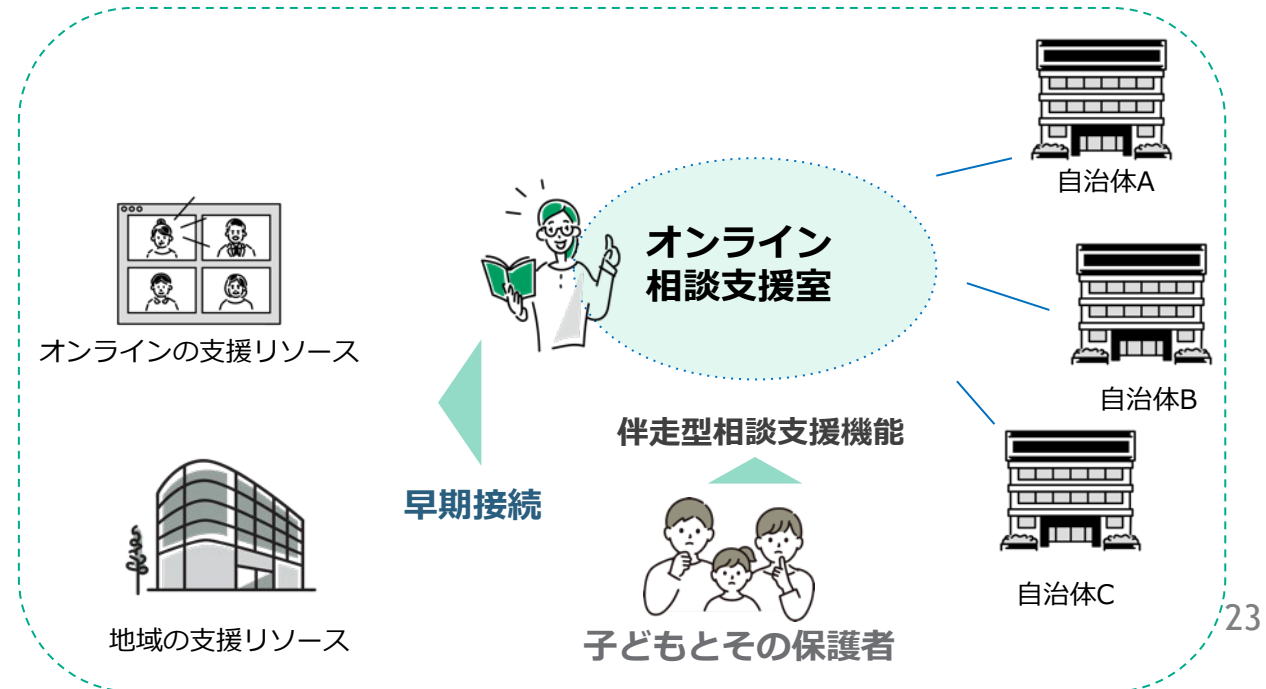
- ・ 導入する自治体を募集し、リソースシェアのインパクトを高めていく
- ・ 「県予算で配置されるSC/SSWの補完としてオンライン相談支援室が機能するか」さらに実証を深めていきたい

	2023年度	2024年度	2025年度	2026年度
自治体連携の拡大（目標）	1	2	3	5

#### ■ オンラインによるSSW（相談支援機能）の共有

来年度以降、連携する自治体の数を増やしていき、オンラインによる相談支援機能の共有が、うまく機能していくのか、また課題は何なのか実証を通じて明らかにしていきたい。

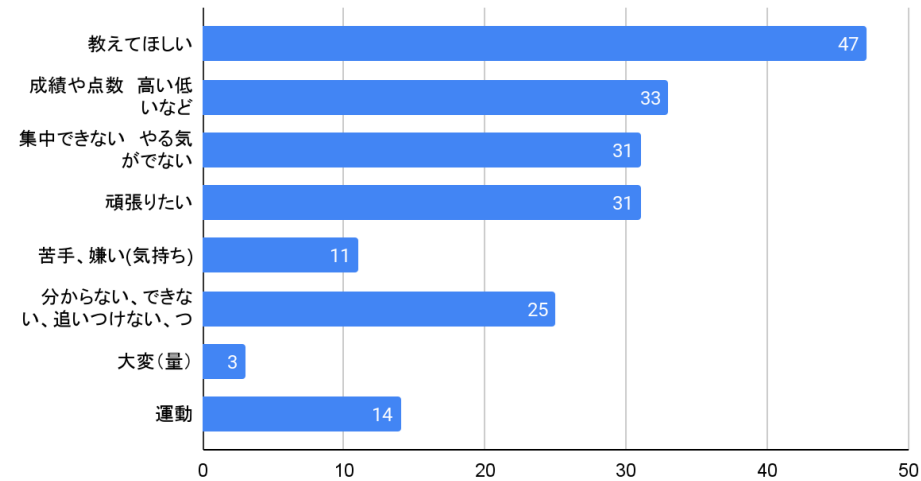
今年度に明らかになった学校との距離感であったり、児童生徒から声が上がった後に、本人の気持ちを尊重しながら、対面での支援にどうつなげていくか継続していくことで明らかになる部分もあると考えている。



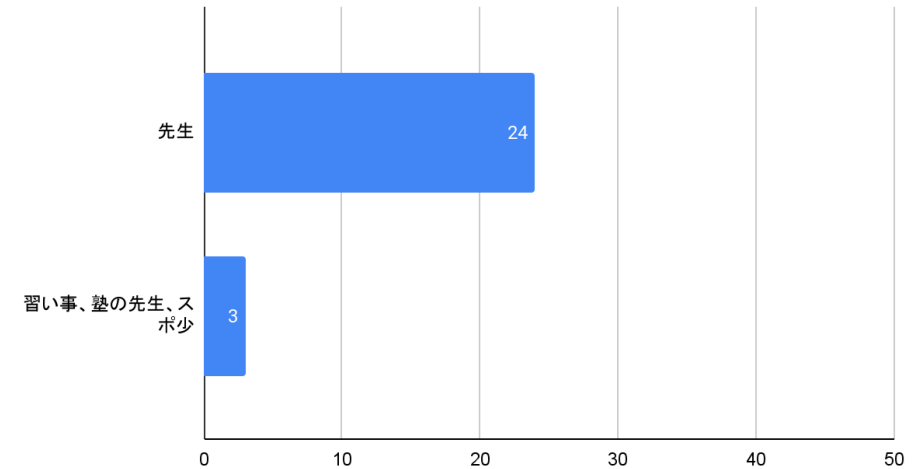


# 7. Appendix - (参考) 子ども相談カテゴリーの詳細

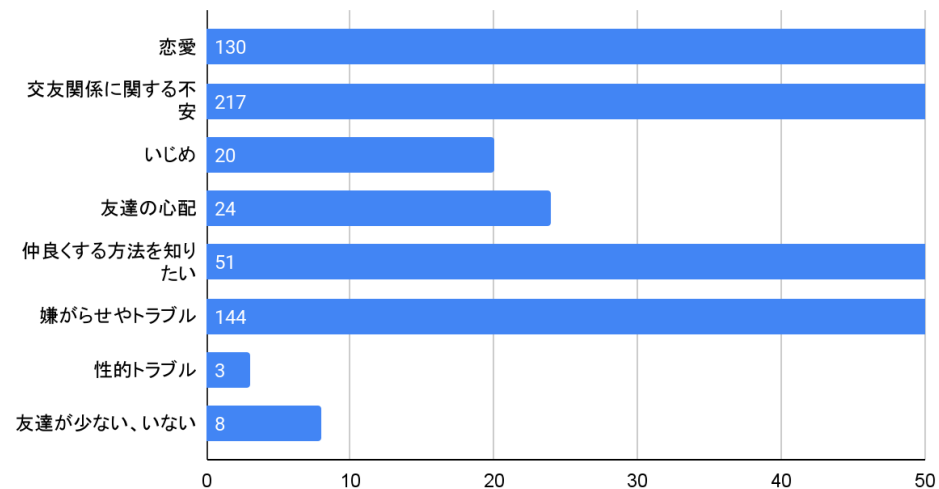
児童生徒相談内容～勉強や教科、運動～



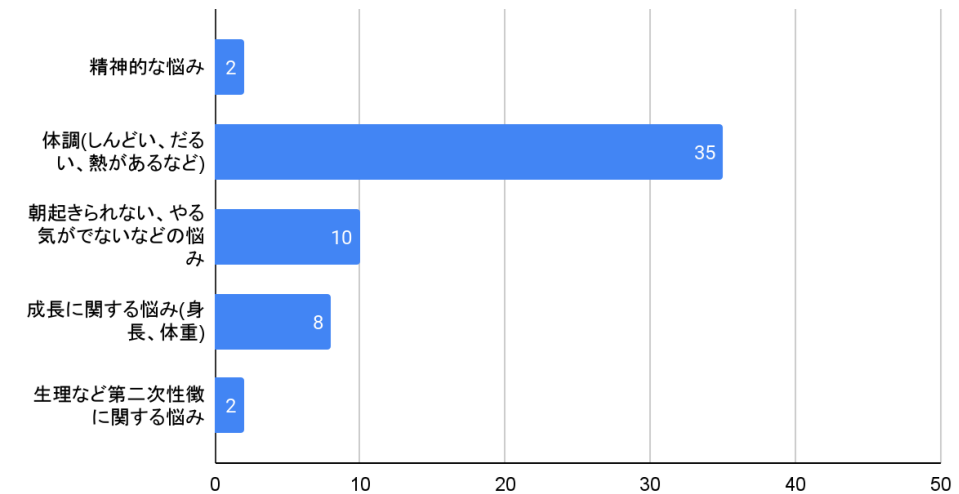
児童生徒相談内容～大人子ども間～



児童生徒相談内容～子ども間～

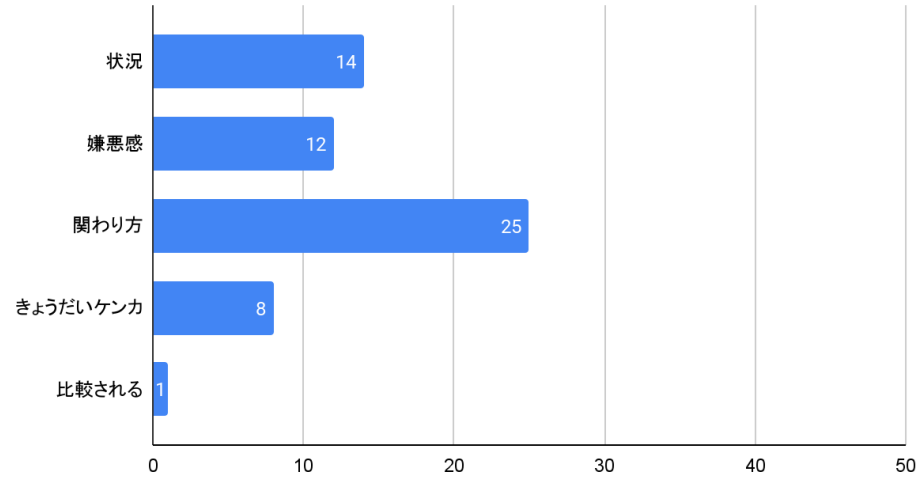


児童生徒相談内容～健康～

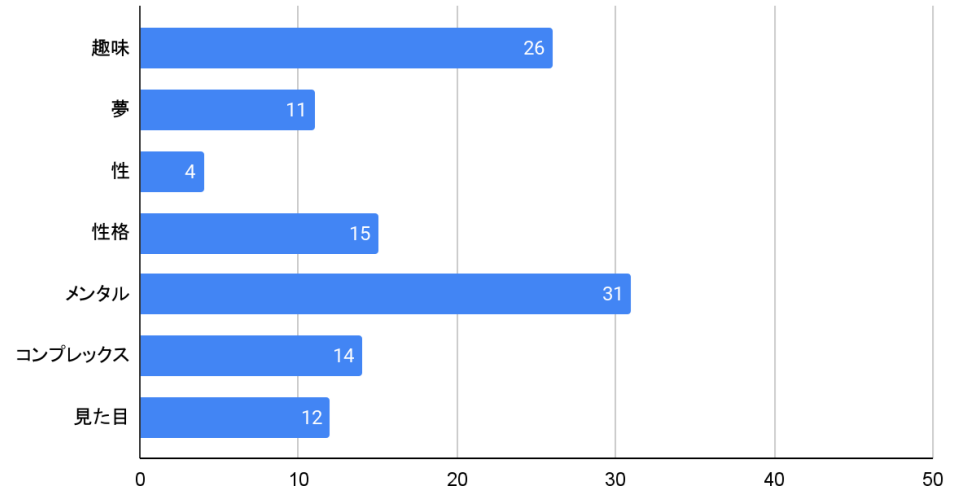


# 7. Appendix - (参考) 子ども相談カテゴリーの詳細

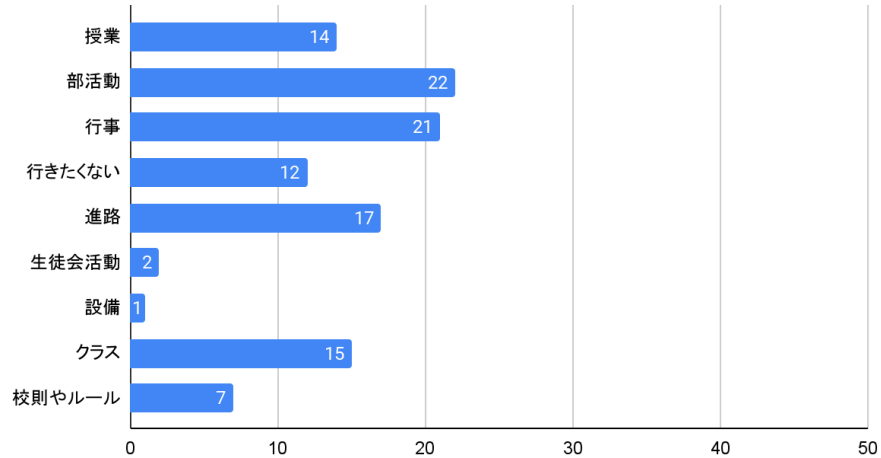
### 児童生徒相談内容～家の人～



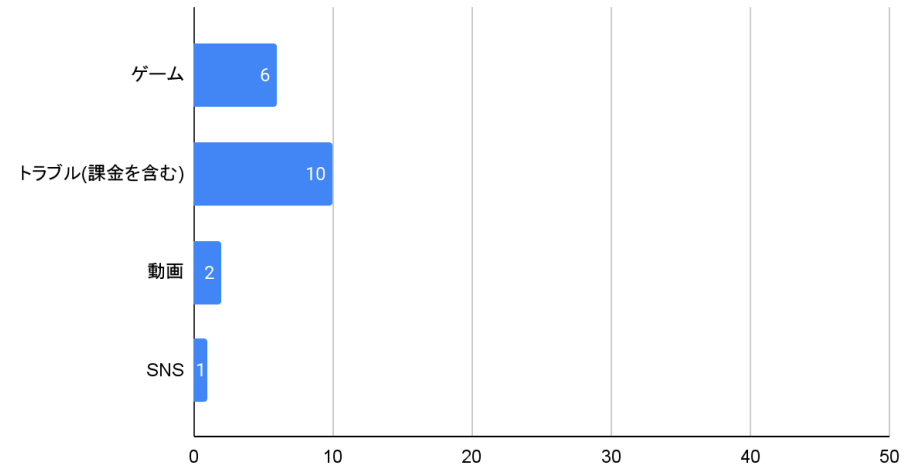
### 児童生徒相談内容～自分～



### 児童生徒相談内容～学校～

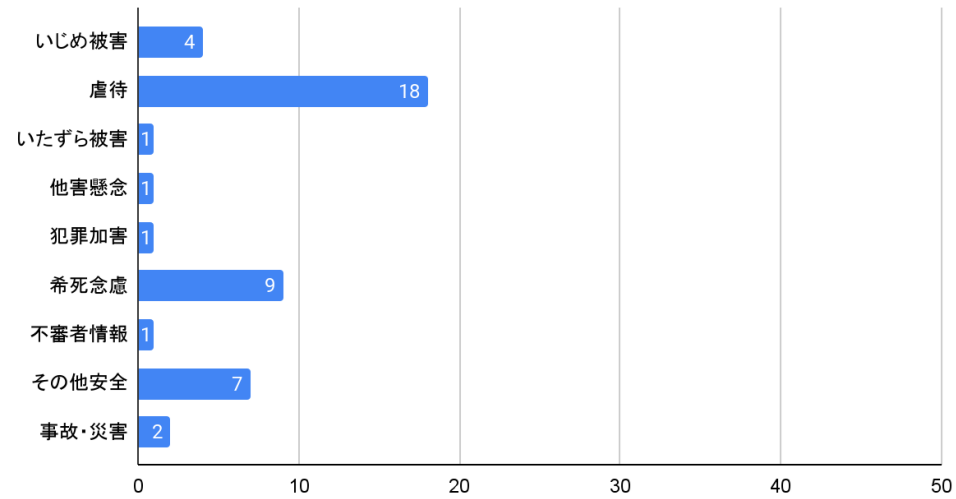


### 児童生徒相談内容～ネット～



## 7. Appendix - (参考) 子ども相談カテゴリーの詳細

児童生徒相談内容～安全～



テーマ2

小規模高校ネットワークの開発

---

## 実証の背景と成果

課題と  
目指す  
姿

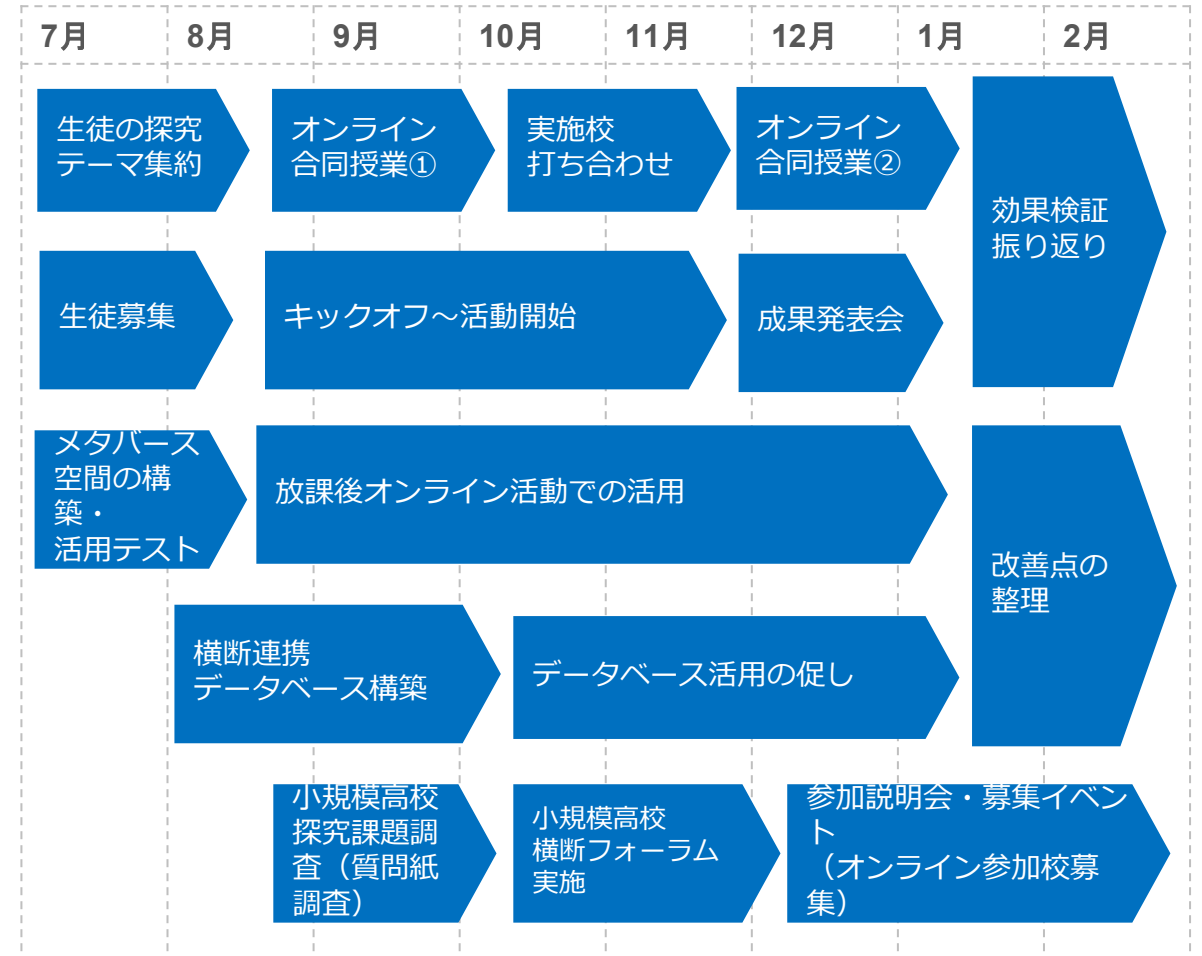
学校小規模化に際し、生徒の多様性に答えるリソース・環境が不足。  
 オンラインを通じて複数校をつなぐことで、過疎地域においても生徒・教員が多様な専門性・関心をもって探究活動を行える環境をつくる。



成果

- ① 探究活動に対する前向きな意欲や、活動の深まり
  - 連携前と連携後のアンケートにおいて、**知的好奇心・関係志向性**等の向上。
  - 探究活動への**苦手意識（探究回避）の低減**。
  - 連携先の学校の生徒の姿が**刺激材料**となり、**探究活動を進める意欲醸成**に寄与。
- ② ネットワークを活用した相互支援事例の創出
  - 連携ネットワーク内で**探究テーマが類似する生徒同士の個別マッチング**を行い、放課後等を活動した連携事例を創出。
  - 学校の背景（立地条件や規模等）が類似する学校間での学び合いにより、**教員間の探究支援不安の解消**に寄与。

## 実証内容



### 背景

#### ② 地方地域における学校の小規模化を背景とした 教員の不足・人間関係の固定化

##### 生徒側の課題

- (1) 自分の興味関心を探究していく意欲を持続しづらい**  
固定化された人間関係の中で、自分の興味関心を表明しづらい。探究活動に意欲があっても、同じテーマに関心をもつ同級生と出会うことが難しく、継続的に探究を深めていくことに困難を抱えやすい。
- (2) 生徒の興味関心と教員の専門性がマッチしづらい**  
自分が持ったテーマの専門領域に詳しい教員がおらず、探究を深めるための支援を得られにくい場合がある。

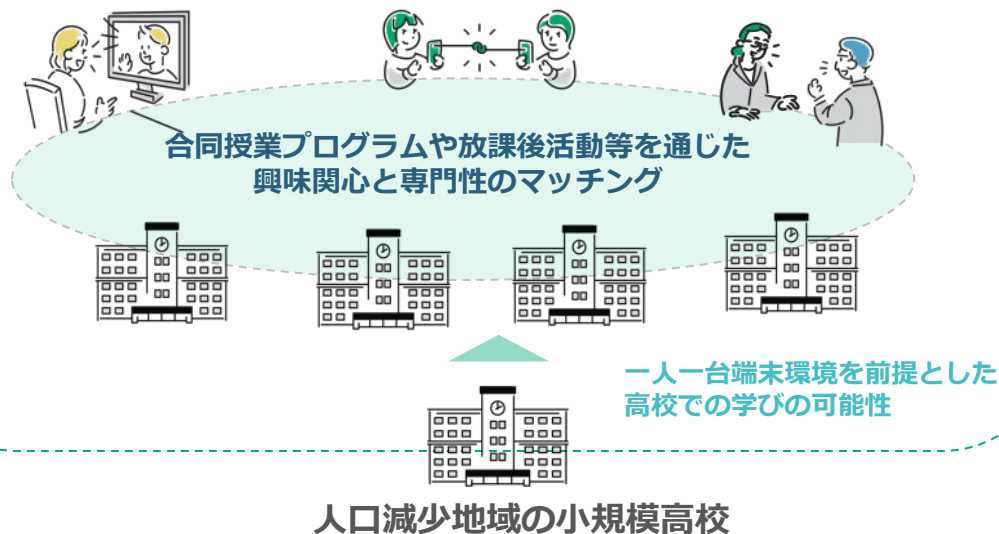
##### 教員側の課題

- (3) 探究学習の支援に対する知見不足に陥りやすい**  
探究学習が授業で本格的に開始する中、教員数が少ないために学校内に蓄積される知見が乏しい。あるいは指導の仕方が固定化し、柔軟な方法を試すことができない。

### 目指す姿

#### あるべき姿② 個別の興味関心にあわせて、最適な 専門性を持つ教員や同級生とつながることができる

##### リソースシェアリング実証② 複数校オンライン連携による多様な専門性・関心の共有



## 3. 実施体制・実証フィールド

### 実施体制

事業受託者：認定特定非営利活動法人カタリバ

- 統括責任者：今村久美
- 執行責任者：瀬川知孝・菅野祐太
- 渉外担当：起塚拓志
- 推進担当：星野眞理・浜田未貴・佐藤宏亮・平田紅梨子

再委託先

<プログラム運営>

- 上地周
- 湯目由華
- 萩本明香里

<調査研究>

- 池田利基（効果検証設計・評価指標開発 協力）
- 金子楓（効果検証設計・評価指標開発 協力）

### 実証フィールド

- 北海道鹿追高等学校
- 岩手県立大槌高等学校
- 岩手県立金ヶ崎高等学校
- 山形県立小国高等学校
- 茨城県立小瀬高等学校
- 長野県軽井沢高等学校
- 長野県阿南高等学校
- 埼玉県立越生高等学校
- 中村高等学校
- 第一学院高校横浜キャンパス
- 愛知県立足助高等学校
- 静岡県立川根高等学校
- 京都府立須知高等学校
- 島根県立吉賀高等学校
- 島根県立浜田商業高等学校
- 長崎県立猶興館高等学校
- 宮崎県立高千穂高等学校
- 熊本県立小国高等学校
- 熊本県立天草拓心高等学校

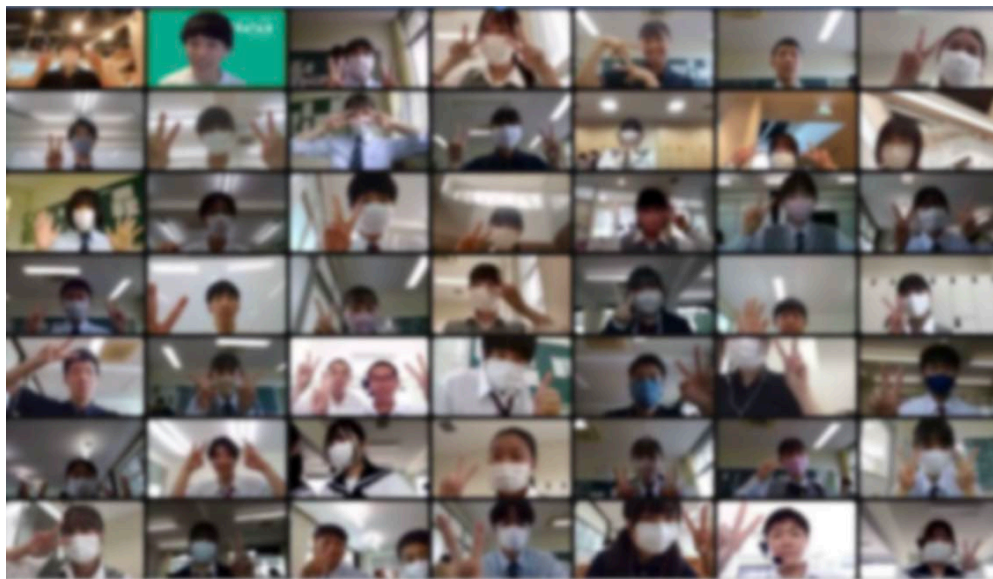
## 4. 実証内容概要

項目	取り組み内容	狙い
①複数校連携オンライン授業による多様な出会い（生徒・支援者）のシェア	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 興味関心が近い生徒同士を繋ぎ。支援者の専門にあわせてサポートする合同授業実施</li> </ul>	生徒の興味関心を支える リソースとナレッジシェア <ul style="list-style-type: none"> <li>● 小規模高校において、生徒の興味関心にマッチした教員や生徒と、授業を通じて、出会いの機会をつくる</li> </ul>
②メタバースを活用したオンライン連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 探究活動に高い関心を持つ生徒を対象に、探究活動の促進を目的とした放課後オンライン連携</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 自校の人数が限られていても、切磋琢磨できる仲間と出会える</li> </ul>
③共通リソースとしての探究データベース開発	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 各校の探究テーマや支援教材を集約し、ネットワーク内で相互参照可能にする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 探究活動の支援ノウハウの不足解消</li> </ul>
④公開イベントを通じた課題広報	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 小規模高校の教育充実をテーマとしたシンポジウムを実施する</li> </ul>	複数校連携による効果の検証・課題広報 <ul style="list-style-type: none"> <li>● 小規模高校の探究支援における具体的課題の検証およびプロモーション</li> </ul>
⑤効果検証および小規模高校の課題調査指標開発	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 小規模高校に通う高校生の探究活動における課題調査の開発および実施</li> <li>● 各種プログラムを通じた生徒の意識変容を調査する質問紙調査の設計および実施</li> </ul>	



### ① 複数校オンライン合同授業

3校～5校を接続し、オンラインでの合同授業を実施。自分の学校では出会えない多様な生徒・サポーターと交流し、探究活動の相互応援や質疑応答を通じた気づきを生むことをねらう。サポーターには教員と外部人材を組み合わせ、生徒の探究テーマに近い専門領域をもつ人員を配置。



#### 第1回アイスブレイク交流会（実証期間前）

##### <内容>

- ・オンラインに慣れること・連携参加校同士の相互理解を深める
- ・学校紹介やアイスブレイク活動

#### 第2回探究テーマ交流授業

##### <内容>

- ・探究テーマが近い生徒同士で4名程度のグループをつくり、お互いの探究活動内容を紹介
- ・グループに1名ずつ大人のサポーターをつけアドバイス・司会進行

#### 第3回合同発表・振り返り会

##### <内容>

- ・探究テーマが近い生徒同士で4名程度のグループをつくり、お互いの探究活動内容を紹介
- ・グループに1名ずつ大人のサポーターをつけアドバイス・司会進行

### ② メタバーズを活用したオンライン連携

2次元メタバーズ「MetaLife」を活用し、合同授業以外でのオンライン連携を実施。放課後交流プログラムとして大学生との交流企画や、関心が近い生徒同士を個別に接続する活動を実施。加えて、通常の探究授業時間が重なっている学校を対象とし、探究活動の個別相談スペースを開室。

#### 放課後交流企画

複数校が共通して関心をもつテーマに関する交流会  
探究活動の経験者によるゲストトーク 等



▲探究の経験がある大学生を交えた放課後交流の様子

#### 探究テーマ交流会

同じ領域の探究活動を行っている生徒同士を  
個別につなぎ、活動紹介や意見交換



▲「校則の見直し」をテーマにしている生徒同士の交流



学校の端末から接続

## ③ 共通リソースとしての探究データベース構築・ナレッジシェア

本ネットワークのプログラムに参加している生徒（約700名分）の探究テーマを一覧表化したデータベースを構築。連携校間で相互シェアし、生徒の個別マッチングに活用。また、教員間のコミュニケーションツールとしてslackを導入し、連携校の教員間が手軽にやりとりができるように促した。

### ● 探究テーマの一覧データベース

- 連携参加校18校・生徒約700名の探究テーマおよび資料を一覧化
- 各探究活動に分野を割り振り、ソート検索機能を付与

【検索用】2023年度 参加校生徒 探究テーマ一覧					
★本シートは連携校への限定公開としておりますので、外部への共有はお控えください。新しくアクセスされたい先生がいる場合は、【お					
シートの使い方	(1) 類似したテーマの生徒を見つける				
	・E列・F列の【分野】で絞り込み、類似テーマを探すことができます ・もしくは、B列の分野一覧から分野名をクリックいただくと、該当分野を掲載したタブに飛ぶことができます				
▼分野名をクリックください	ID	分野1	分野2	学校	探究テーマ (問い)
	060110	デザイン		高校	1組 10 3Dデザイナーについて
	060111	エンタメ		高校	1組 11 アニメはなぜたくさんあるのか
	060112	健康・スポーツ	人体	高校	1組 12 100mをどうやったら速く走れるの
	060113	保育・教育		高校	1組 13 子供に関わる仕事には、どんな
	060114	生き物		高校	1組 14 季節によってのバス釣りのしかた
	060101	心理	脳科学	高校	1組 01 なぜ「うそ」をつくの
	060102	国際	食	高校	1組 02 いるんな国の料理/食べ物を食べる/
	060103	IT・テクノロジー		高校	1組 03 パソコンの良さ伝えて、おすすめ
	060104	社会	デザイン	高校	1組 04 自分にできることはなにか？
	060105	ゲーム		高校	1組 05 ゲーム
	060106	食		高校	1組 06 おいしいうどんを作るには
	060107	生き物		高校	1組 07 動物の命について
	060108	健康・スポーツ		高校	1組 08 水泳
	060109	ものづくり		高校	1組 09 自分好みにカスタムした机を作る
	060210	福祉	交通	高校	2組 10 高齢者による事故が減らない理由
	060211	エンタメ		高校	2組 11 乃木坂の給料
	060212	健康・スポーツ		高校	2組 12 サッカーの憧れの選手について
	060213	音楽	エンタメ	高校	2組 13 ジャニーズのおすすめの曲を聴いて
	060214	交通	健康・スポーツ	高校	2組 14 みんなが乗っている自転車とロー
	060201	美容・ファッション		高校	2組 01 美容師

### ● slackを活用した情報交流

- 生徒の探究活動へのサポート呼びかけ（アンケート協力要請等）
- 特定の関心を持った生徒の募集 等



## 4. 実証内容詳細

④

### 小規模高校の未来を考える公開イベント

小規模高校の課題や可能性を発信し、これからの小規模高校経営の在り方について考える公開イベントを実施。生徒の交流活動に使用している二次元メタバース（MetaLife）を使い、全国どこにいても場所と学びを共有する未来の学習環境をイメージ。有識者によるパネルディスカッションおよび小規模校ネットワーク参加校による分科会セッションを実施。

#### 小規模高校横断フォーラム

- 11月23日(木祝) 13:30 - 16:45
- 二次元メタバース「MetaLife」で実施

#### ■ 登壇者：

- 合田哲雄氏 文化庁次長
- 濱田久美子氏 前高知県教育センター長

#### ■ 分科会登壇校：

- 岩手県立大槌高校  
「小規模高校における探究的活動の推進に向けたカリキュラムマネジメント」
- 山形県立小国高校  
「地域連携による生徒の主体性を高める工夫と それを支える大人の在り方」
- 静岡県立川根高校  
「教育活動を支える教員組織が“チーム”として成長していくための学びづくり」

無料オンラインイベント

# 小規模高校 横断フォーラム

**11.23** 木 13:30-16:45  
オンライン | 二次元メタバース MetaLife




## 4. 実証内容詳細

### ⑤ 課題調査指標の設計

心理学のバックグラウンドをもつ研究者と協働し、小規模高校における探究資源の調査指標 および連携ネットワークの効果検証のための評価指標と質問紙調査を開発。

#### ①小規模高校ネットワークのアウトカム調査

- 目的：小規模高校の連携による人材シェアを行うことで、生徒・教員にどのような変化が生まれるのか明らかにする
- 取得時期：2023年7月・2月
- 取得対象：小規模高校ネットワーク参加校の生徒
- 取得項目：生徒の探究スキル

##### ○生徒：

###### [測定尺度]

- ・ 知的好奇心、ソーシャルスキル
- ・ 関係志向性（他者と関ろうとする前向きな意欲）
- ・ 自己理解
- ・ 探究回避（答えのない問いに取り組むことの抵抗感）

#### ②小規模高校における探究資源調査

- 目的：小規模高校における探究活動の推進において、どのような資源が不足しているかを明らかにする
- 取得時期：2023年9月
- 取得対象：小規模高校ネットワーク参加校の生徒・教員  
大規模高校の生徒・教員
- 取得項目：生徒／教員の探究活動の資源に関するもの

##### ○生徒

###### [測定尺度]

- ・ 社会経済的地位
- ・ 探究学習における人的ネットワーク
- ・ 探究回避（答えのない問いに取り組むことの抵抗感）
- ・ 自律的援助要請

##### ○教員

###### [測定指標]

- ・ 探究活動支援における接続先のバリエーション
- ・ 生徒の探究スキルに関する認識
- ・ 探究支援への自信／ノウハウに関する認識 等

## 5. 実証結果概要

項目	結果
①複数校連携オンライン授業による多様な多様な出会い（生徒・支援者）のシェア	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 知的好奇心・関係志向性等の向上／探究回避傾向の低減</li><li>・ 各校における探究活動の推進のしやすさに対する貢献</li></ul>
②メタバースを活用したオンライン連携	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 探究活動に高い関心を持つ生徒による学び合い事例の創出</li><li>・ 放課後の探究コミュニティ形成に向けた示唆の獲得</li></ul>
③共通リソースとしての探究データベース開発	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 生徒同士のマッチングを促すコーディネートツールの開発</li><li>・ 教員同士の学び合い機会の創出</li></ul>
④公開イベントを通じた課題広報	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 小規模高校関係者のイベント参加・メディア掲載の獲得</li><li>・ ネットワークへの連携校数の増加</li></ul>
⑤効果検証および小規模高校の課題調査指標開発	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 小規模校の課題に関する質問紙調査の開発</li><li>・ 小規模高校の課題状況に関する示唆の獲得</li></ul>

## ① 複数校オンライン合同授業による生徒の変化

得られた成果：プログラム前後比較における知的好奇心・関係志向性等の向上。自尊感情も部分的に向上がみられた。

### 肯定的回答率

項目	設問	事前	事後	差分 (事後-事前)	向上した 割合
1 知的好奇心1	新しい事に挑戦することは好きだ。	68.3%	73.1%	4.8%	31.6%
2 知的好奇心2	誰もやった事のない物事にとても興味がある。	59.6%	66.5%	6.9%	32.9%
3 知的好奇心3	どこに行っても、新しい物事や経験を探す。	46.6%	53.3%	6.7%	38.3%
4 知的好奇心4	今までやったことのない課題にもよろこんで取り組める。	39.1%	51.9%	12.8%	41.8%
5 知的好奇心5	新しいアイデアをあれこれ考える。	54.7%	62.3%	7.6%	37.4%
6 知的好奇心6	何事にも興味関心が強い。	53.5%	63.2%	9.7%	38.1%
10 関係志向性1	自分の考えを人に聞いてもらいたいと思う。	66.9%	73.6%	6.7%	31.8%
11 関係志向性2	うれしくてたまらないときは自分の気持ちを人に話したいと思う。	84.9%	89.2%	4.3%	26.5%
12 関係志向性3	つらいときや悩んでいるときは自分の気持ちを人に話したいと思う。	55.0%	69.3%	14.4%	32.9%
13 関係志向性4	寂しいときや悲しいときは自分の気持ちを人に聞いてもらいたいと思う。	57.8%	66.4%	8.6%	29.2%
14 関係志向性5	迷っているときは人の意見を聞きたいと思う。	86.7%	93.8%	7.2%	20.1%
15 関係志向性6	人からのアドバイスは役立つと思う。	93.2%	95.7%	2.5%	23.4%
16 2項目版自尊感情1	自分にはいろいろなよい素質があると思う。	20.1%	13.9%	-6.2%	28.9%
17 2項目版自尊感情2	自分のことを好ましく感じる。	25.7%	36.2%	10.5%	41.8%

38

## 5. 実証結果詳細

### ① 複数校オンライン合同授業による生徒の変化

得られた成果：プログラム前後比較における「探究回避」傾向（探究活動に対する苦手意識）の低減。

肯定的回答率（★は反転項目）

	項目	設問	事前	事後	差分 (事後-事前)	向上した 割合
20	探究回避1	探究の学習は苦手である（★）	75.2%	49.0%	-26.2%	49.2%
21	探究回避2	正解が一つとは限らない探究学習は苦手である（★）	67.9%	40.5%	-27.4%	41.9%
22	探究回避3	テストや受験に関係ない探究の学習はできるだけしたくない（★）	48.0%	31.1%	-16.9%	41.9%
23	探究回避4	探究の学習で調べたことをまとめて発表するのは苦手である（★）	66.5%	44.3%	-22.2%	53.3%
24	探究回避5	自分の関心に基づいて課題を設定する探究の学習は苦手である（★）	60.7%	31.6%	-29.1%	55.4%
25	探究回避6	探究の学習は自分で考えることが多いので苦手である（★）	55.9%	31.3%	-24.6%	49.3%



## 5. 実証結果詳細

### ① 複数校オンライン合同授業による生徒の変化

得られた成果：合同授業で出会った生徒の活動事例を参考にしたり、連携先の生徒を情報源として活用したりすることで、みずからの探究活動を発展させる事例の創出。また、他地域の同級生と出会うことによる意欲の高まり。

#### <探究活動プロセスへの反映>

- 合同授業で得たアドバイスや示唆を探究活動へ反映
  - 具体的な活動内容への反映
    - 他の生徒が実施している活動内容を模倣する
    - アドバイスされたことを実際に自分の活動として実践する
    - 連携ネットワークを情報源として活用（アンケート・インタビュー先）

#### <合同授業を通じた意識変容>

- 他地域の同級生という出会いからの気づき
  - 「他地域の人って、方言も違うし、でも住んでいるところの感じは似ていて、違うけどこんなに同じなんだと思って、不思議な感じでした。だからそういう人が探究のことを話すと、『何を話すんだろう？』っていう気持ちで、自分のクラスメイトと話すのとは全然違う感じでした」
- 探究活動に対する意欲・展望
  - 「他の地域の人々のやっていることを見て、自分もこんなことをやってみることができるのかなとか、**考えていなかったことを考えてみよう**という気持ちになりました」
  - 「最初は何をすれば良いのかわからず迷っていましたが、他の人の発表を見て、**やりたいことをやろう**と思い、**進路に繋がられたような気がします**」

#### 交流

他の高校の人も同じような災害についてマイプロのテーマにしていたので、オンラインで繋がって話した。

ー・ハザードマップがみんなあまり知らないから広めよう！

小国町のハザードマップを広めるには？

・非常食も広めたい！

動画やホームページで広げたいと思っているが、どうしたらよいか？



▲合同授業で交流した生徒の探究内容を実践

#### ウバザメの第一印象アンケート結果！！

225件の回答をいただきました！！

- |             |            |
|-------------|------------|
| ◎口、体が大さい！   | ◎不気味       |
| ◎何でも食べられそう！ | ◎深海にいそう    |
| ◎怖い         | ◎強そう       |
| ◎かわいい       | ◎魅力的       |
| ◎優しそう       | ◎いっぱい食べれそう |
| ◎きもい        | ◎古代の魚みたい   |
| ◎チョココロネみたい  | ◎生活しづらそう   |
| ◎友達に似てる     | など！        |

▲連携校にアンケート協力を依頼し多数の回答を得る

## 5. 実証結果詳細

### ① 複数校オンライン合同授業による生徒の変化

#### ■ 教員からの声（アンケート・インタビューより）

##### <探究活動の推進への寄与>

- 「**自分の学校の中だけでは、探究に意欲を向けさせることが本当に難しかった**ですが、一回目の合同授業が終わった後から、生徒が「**交流に向けてやらなきゃ**」となり、動き出した感じがありました」
- 「他の地域の生徒がどんなことをしているのかを見られたことが一番大きかったと思います。自分たちもこんなことができるのかなというイメージを持てていなかったので、**合同授業でやっと何ができるのかわかってきた生徒が多かった**と思います。」
- 「合同授業前は、『自分は司会なんてできない』『知らない人と話すのは嫌だ』など、**最初はネガティブな反応をしている生徒が多かった**のですが、実際にやってみると『すごく楽しかった』という生徒がほとんどでした。なかには、話をした他校の生徒と個別に連絡先を交換したいと申し出てきた生徒もいて、**まずはやってみること、一歩踏み出してみることの大切さを改めて実感しました。**」

##### <他地域の生徒からの触発>

- 「私自身も他校の生徒の意欲的な姿に刺激を受けて、『**うちも負けていけない。もっとこういう経験をさせたいな**』と、前向きに考えるきっかけになりました。」

合同授業による出会いが「自分ももっとできる」と気づいたり、「よい活動にしたい」という意欲を持つきっかけとなり、探究活動の推進に寄与（▶活動の進展・教員の指導負担の軽減）

## 5. 実証結果詳細

### ② メタバースを活用したオンライン連携事例の創出

得られた成果：連携ネットワーク内で探究テーマが類似する生徒同士の個別マッチングを行い、放課後等を活動した連携事例を創出。授業時間内でオンラインスペースに入室することができる機会を設定し、生徒自身がメタバースに慣れていくプロセスを設計。

#### ■ 授業時間を活用した探究相談スペースの開室

学校	参加者
■ 岩手県立大槌高校	15名
■ 長野県立軽井沢高校	5名
■ 茨城県立小瀬高校	6名
■ 埼玉県立越生高校	6名
■ 中村高校	9名
■ 山形県立小国高校	5名
■ 京都府立須知高校	5名
■ 長崎県立猶興館高校	12名
■ 熊本県立小国高校	3名
■ 第一学院高校 横浜キャンパス	4名
■ 静岡県立川根高校	1名

#### ■ 探究相談スペース

- ・複数の学校が探究授業を実施している時間帯に、探究活動の相談や交流ができるオンラインスペースをメタバースで開室。

- ・授業日程の変更調整が不要であるため、学校の調整コストを抑えながら実施。



#### ■ 探究テーマ同士の個別マッチング事例

##### ■ 「若者の政治参加」

参加生徒：長崎県立猶興館高校・島根県立吉賀高校・熊本県立小国高校・岩手県立大槌高校

##### ■ 「校則の見直し」

参加生徒：長崎県立猶興館高校・島根県立吉賀高校・熊本県立小国高校・岩手県立大槌高校

##### ■ 「メイク用品の開発」

参加生徒：長崎県立猶興館高校・長野県立軽井沢高校

##### ■ 「県外留学生の過ごしやすい環境づくり」

参加生徒：岩手県立大槌高校—山形県立小国高校

##### ■ 「健康維持のための運動習慣」

参加生徒：中村高校・熊本県立小国高校

##### ■ 「動物の殺処分防止」

参加生徒：埼玉県立越生高校・茨城県立小瀬高校

### ③ 共通リソースとしての探究データベース構築・ナレッジシェア

得られた成果：ネットワークの教員が共通して感じている課題意識をもとにした学び合い・相互支援の機会創出。

#### 連携校教員の探究活動支援に関する課題意識 (ヒアリング・アンケートより)

- 探究活動の支援方法について
  - モチベーションが低い生徒にどう対応するか。
  - 授業で生徒全体に対して探究活動を支援する際に意識していることやポイントだと思っていること
  - 現地調査、インタビュー等への向かわせ方
- 探究の内容にあわせた外部接続
  - 生徒と外部の伴走者との接続方法
  - 教員がどのようにして外部とつながればいいのか
- 探究活動の推進体制について
  - 探究活動の準備や運営などの担当づくり
  - どのようにして教員の当事者意識を高めるのか

#### 教員間の学び合い事例

- ① 「探究を深めるための指導法とは？」をテーマにした集合研修
- ② 探究カリキュラムの改善に関する相談研修会
- ③ 教員の探究支援スキルの向上に関する座談交流会
- ④ 探究活動の資金獲得方策（クラウドファンディング等）に関する情報交換
- ⑤ 「問いを立てる」活動の教材に関する情報交換会
- ⑥ 中高連携の実践に関する情報交換会



#### 参加した教員の声

「学校が違って、**みんな同じような悩みを持ってるんだとか、そういうことを実感できるだけでも心の栄養になるので**。解決策も見つかればいいし、つながりはまずはそういうところが大事ですかね」

「**学校の中の教員は数が限られるので、外部に相談できる相手がいることは心強いというか、ほっとしますね。**同じような悩みを通り過ぎてきたなと思うこともあるので」

「**教員も、仕事に追われて新しいことに踏み出すのが難しい現実があります。**教員同士の交流の場に参加したことで、悩みを共有したり、新しい見方・考え方に会ったりして、私自身にとっても良い機会になりました」

## ④ 公開イベントを通じた課題広報・認知向上

得られた成果：小規模高校関係者・その他教育関係者あわせて約100名がメタバースに集い、小規模高校の今後について考える場となった。メディア掲載が複数あり、小規模高校の今後について広く発信する機会となった。あわせて、参加した学校の中から4校が2024年度のネットワーク参加校として決定。

### ■参加者内訳：

高等学校関係者	約70名
小・中学校関係者	約10名
大学関係者	約10名
その他	約20名
<b>計約100名</b>	

\*うち**4校** 2024年度連携に参加内定

### ■メディア掲載

「教育新聞（2023年11月24日）  
「寺子屋朝日」  
「キャリアガイダンス編集部ブログ」  
「内外教育」（2023年12月号）

### ■参加者からの声

- あらためて小希望校同士がつながることの重要性を確認しました。**規模によらずいい学びが創れる可能性があること、デマンドサイドに軸足を移していく必要性、リソースの再配分などこれから考え・実践していきたい多くの視点をいただきました。**
- **小規模高校の現状について解像度が深まり、また遠隔授業の可能性を強く感じられるイベント**でした。
- **関係者を集めて議論をする。**今回のコンセプトや企画にとっても共感しました。
- **小規模高校横断の試行錯誤が、20年30年後の日本の教育のあり方に通じる可能性を秘めている**と感じられる貴重な機会になりました。
- 私も小規模校に勤めていますが、**生徒だけでなく、先生方もやりにくさを感じている**というところで、動きにくい組織を動かしていく理論がとても興味深かったです。



## ⑤ 課題調査指標の設計

得られた成果：研究者と共同で小規模高校における探究活動に関する課題調査を実施。大規模高校との比較調査により、小規模高校の課題状況や、その課題を乗り越えるためのポイントについて示唆が得られた。

### 調査概要

調査方法	Webアンケート
調査期間	2023年7月～10月
調査対象	全国の小規模校／大規模校
回答数	高校生 約1,200名 教員 約100名
調査項目	<p>【生徒】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>探究活動の支援者となる人的つながり</li> <li>探究活動に対する意欲</li> <li>協働的活動に対する意欲</li> <li>社会経済的地位に関すること 等</li> </ul> <p>【教員】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>探究活動支援における生徒／教員の課題</li> <li>探究活動支援に活用できるネットワーク 等</li> </ul>

### 結果サマリー

#### <小規模校の課題状況>

- 小規模校の生徒は、大規模校に比べて支援者のつながり、探究への意欲、協働への意欲等の課題が大きく、社会経済的地位でもハンデを負う傾向にある。

#### <課題状況を打破するためのポイント>

- 「探究活動の支援者が重要である」と感じている生徒や、「大学への進学希望」を持っている生徒は、探究活動への回避意識が低くなる傾向が見られた。

#### <教員の課題>

- 教員自身の課題意識に大規模／小規模校の差はないが、生徒のスキルや意欲に関する課題は小規模校の方が大きい。

※それぞれ、該当尺度における統計的有意差の検証を実施

### 実証から得られた示唆（小規模校ネットワーク）

#### 遠隔オンラインネットワークでの出会いが探究活動の促進資源になる

- ・ 多様な興味関心をもつ他校の生徒という存在自体が、生徒にとって学びの意欲を高める資源となる。
- ・ 生徒が意欲づけられることで、各校で行う教員の探究支援が行いやすくなる効果がみられた。
- ・ 一方、教員の専門性シェアについては、それぞれの学校が小規模ゆえに、生徒の探究テーマに合致する専門性を持つ教員数が限られ、活用は部分的にとどまった。

#### 連携のバリエーションやインパクトを最大化するためのコーディネート機能の必要性

- ・ 生徒の興味関心情報のデータベース化の試みや、それを活用した個別接続が機能した。  
ネットワーク参加校・参加生徒が増えるほどマッチングの柔軟性は高まり、連携のインパクトは増える。  
それらの価値を最大化するため、ネットワークを運営し連携を働きかけるコーディネート機能の必要性が示唆された。

#### 学校を越えた継続的な学び合いには、連携を可能にする共通性も必要

- ・ 生徒の放課後時間帯での時間を合わせることが難しく、継続的に学び合うコミュニティ形成には課題が残った。  
一方、探究の授業時間が共通する学校同士での連携を促すことは効果的であり、今後の発展可能性があるテーマとして取り出せた。多様性のある学校同士の中に共通性を見出し、連携を促していくことが必要となる。

## 6. 今後の普及・自走プラン

### ○コーディネート機能

カタリバ事務局が全国連携のコーディネート機能を維持しつつ、エリア単位でのコーディネートは自治体（都道府県教育委員会）との協働をめざす。

- (1) 自治体を越えた全国コーディネート機能：カタリバが事務局機能を継続
- (2) 自治体内でのコーディネート機能：都道府県教委
  - ネットワークへの参加希望校を募集
  - 校内における連携の位置づけ・活用の仕方相談

### ○小規模高校ネットワーク拡大方策

連携の核となる25校程度の連携を継続運営しつつ、多様なネットワーク参加要件を確立する。

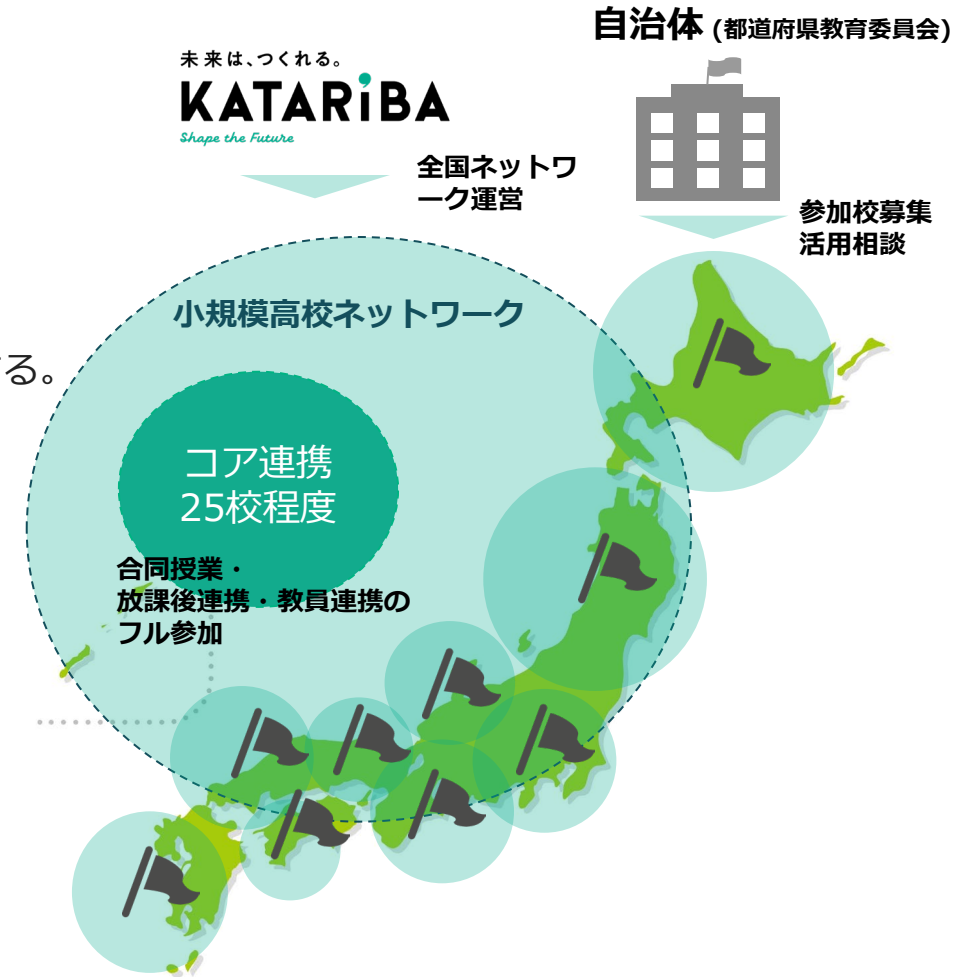
\* 運営コストを鑑み、2023年度と同一内容で連携できる校数上限は25校程度と想定

\* コア連携：合同授業・放課後連携・教員連携のフルモデルでの連携。  
より柔軟な連携参加要件を確立させ、多様な学校の参加を促していく。

#### ■事業展開の方向性：小規模高校のネットワークを拡大

- ・オンラインネットワークへの参加校を毎年募集し、リソースシェアのインパクトを高めていく
- ・3年後(2026年度)には100校（小規模高校シェア約15%）を目指す

目標値	2024年度	2025年度	2026年度
小規模高校ネットワークの拡大	25校	50校	100校





# Appendix : 小規模高校課題調査

## 7. Appendix - 探究活動課題調査（小規模校／大規模高校比較）

調査方法	Webアンケート
調査期間	2023年7月～10月
調査対象	全国の小規模校／大規模校
回答数	高校生 約1,200名 教員 約100名
調査項目	<p>【生徒】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 探究活動の支援者となる人的つながり</li><li>・ 探究活動に対する意欲</li><li>・ 協働的活動に対する意欲</li><li>・ 社会経済的地位に関すること 等</li></ul> <p>【教員】</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 探究活動支援における生徒／教員の課題</li><li>・ 探究活動支援に活用できるネットワーク 等</li></ul>
実施主体	認定NPO法人カタリバ 学校横断型探究事務局

## 7. Appendix - 探究活動課題調査（小規模校／大規模高校比較）

### 生徒向け調査項目

#### 探究の支援者となるネットワーク

- 探究活動の支援者になってくれる人を可能な限り多く思い浮かべると、何人になりますか
- 探究活動の支援者と、平均的にどれくらい連絡を取り合っていますか
- そのような人々は、あなたにとってどれくらい重要ですか 等

#### 探究回避尺度

- 探究の学習は苦手である
- 正解が一つとは限らない探究学習は苦手である
- テストや受験に関係ない探究の学習はできるだけしたくない
- 探究の学習は自分で考えることが多いので苦手である 等

#### 探究実践尺度

- 探究の学習で、レポートを書いたり発表をしたりすることを教科の学習に役立てる
- 将来社会に関わって生きていくためにも探究の学習が必要である
- 探究の学習である問題について調べたり考えたりするのは好きだ 等

#### 自律的援助要請尺度

- 大学や専門学校、就職について先生にききたいと思うときには、何が聞きたいかを整理してからきく
- 自分の進路を叶えるための方法について先生にきこうと思うときには、自分でまず考えたり調べたりしてみしてからきく
- 自分がどの学部や学科、職業に向いているのかについて先生にきくときには、自分で考えるためのアドバイスをしてもらう

#### 依存的援助要請尺度

- 受験や就職活動の面接について分からないときには、自分で考えるよりも、先生にすぐに頼ろうとする
- 自分がどのような職業に向いているか分からないときには、自分で考えるよりも、すぐに先生にアドバイスを求める
- 進学や就職の際に必要な手続きについて困ったときには、自分で調べるよりも、先生に教えてもらうようにたのむ 等

#### グループ活動への関心度

- 話し合いの時に、友達となかよく話し合うことができた
- グループの友達の話聞くことで、いろいろな考え方があることが分かった
- 友達に説明することで、一人で考えていた時より、自分の考えがはっきりした 等

#### 社会経済的地位（SES）

- 世帯状況
- 蔵書数
- 同居家族

#### 進路志望

- 高校卒業後の進路希望  
進学／就職 等

#### 将来の夢・目標

- 叶えたい夢・目標の有無
- 目標に向けた行動の有無

## 7. Appendix - 探究活動課題調査（小規模校／大規模高校比較）

### 教員向け調査項目

#### 探究支援のネットワーク

- これまでの探究活動に関わった外部の関係者は何団体（個人も1団体として数える）ですか
- これまでの探究活動に関わった外部の関係者はどのような団体ですか
- そのような人々を可能な限り多く思い浮かべると、何人になりましたか
- そのような人々と、平均的にどれくらい連絡を取り合っていますか
- そのような人々は、あなたにとってどれくらい重要ですか 等

#### 支援における課題の解決方法

- 同じ学校の先輩の教師に相談する
- 同じ学校の同年代の教師に相談する
- 本を読む、講演を聴くなどして、必要な情報を得て解決する 等

#### 探究活動推進の課題（教員の課題）

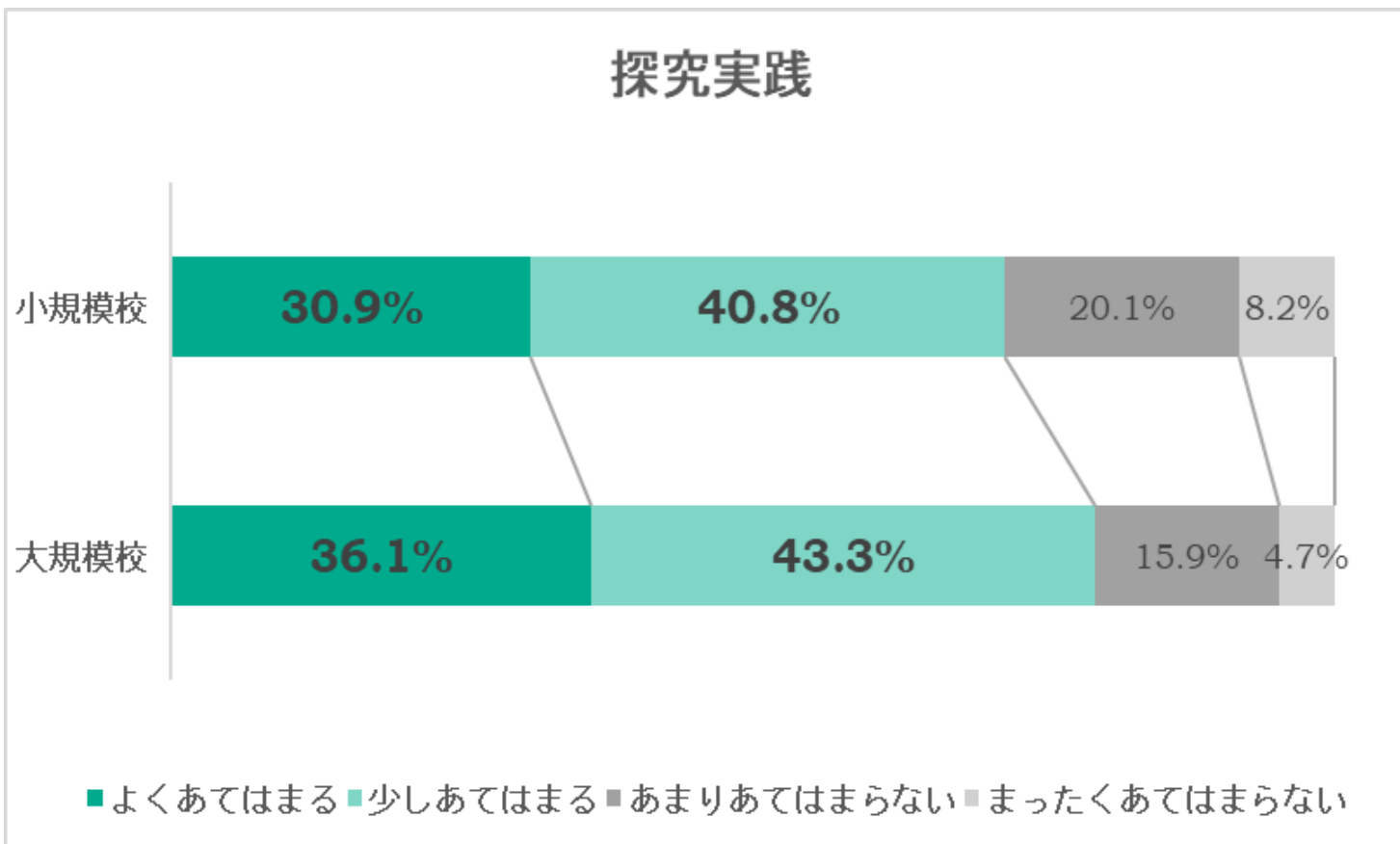
- 活動のプロセスや成果を評価することが難しい
- 科学的に探究するための方法論を教えるのが難しい
- 探究を指導する時間が十分に取れない
- 熱心な先生とそうでない先生の差が大きい
- 教員間で指導のノウハウが共有されていない
- 教科の学習との関連付けが難しい
- 3年間の指導が体系化できていない
- 進路と結びつけるのが難しい 等

#### 探究活動推進の課題（生徒の課題）

- 探究に必要な生徒の知識・技術が不足している
- 熱心な生徒とそうでない生徒の差が大きい
- 生徒が探究すべき課題や問いが設定できない
- 生徒が探究に取り組む時間を十分に取ることができない
- 生徒が主体的に取り組むことができない
- 生徒同士と協働して活動ができない 等

### 生徒対象調査

「探究回避」の尺度において、  
大規模校の方が小規模校よりも肯定的な結果を示す  
統計的有意差が観測された

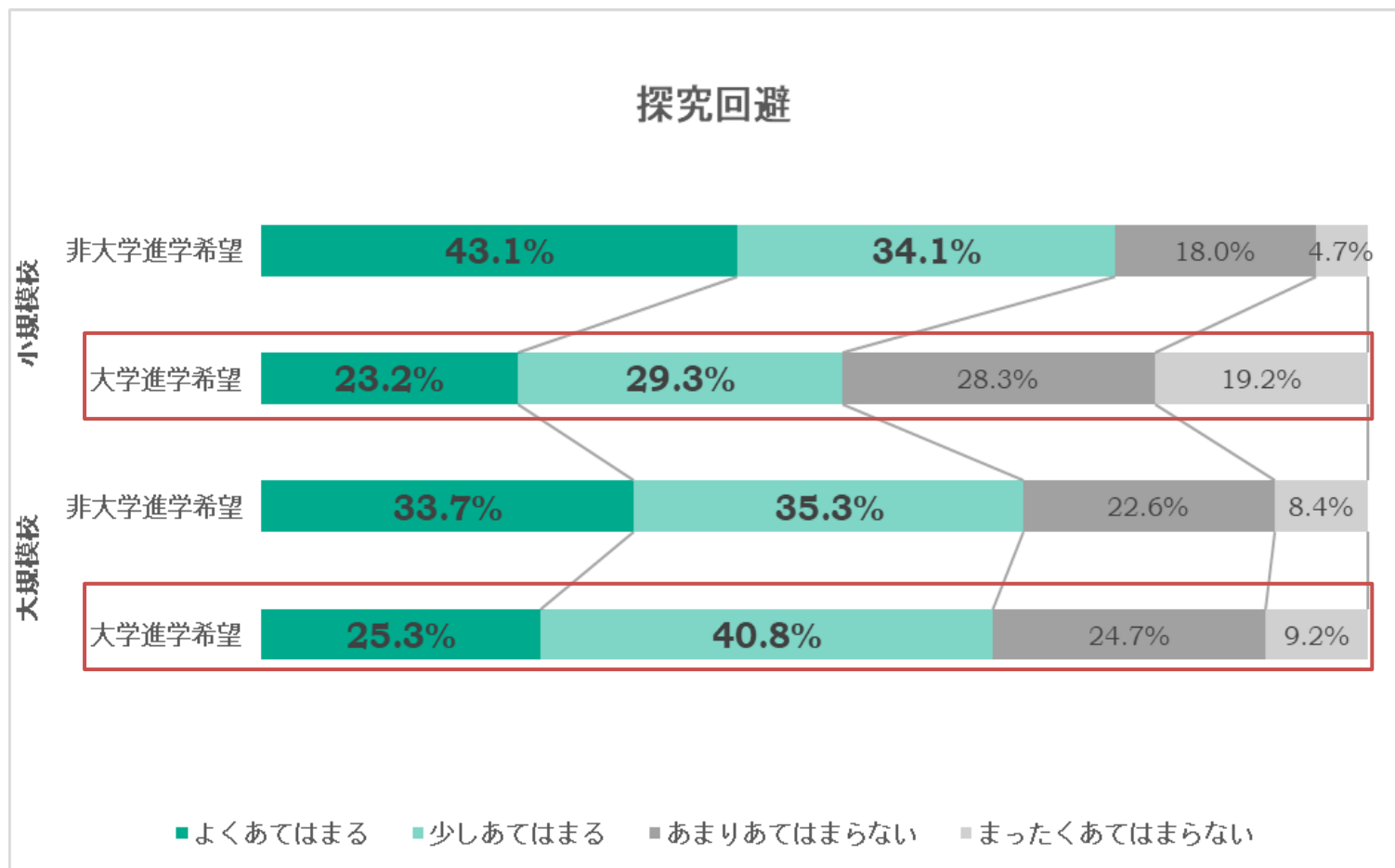


### 【探究実践】

- 探究の学習で、レポートを書いたり発表をしたりすることを教科の学習に役立てる
- 将来社会に関わって生きていくためにも探究の学習が必要である
- 探究の学習である問題について調べたり考えたりするのは好きだ

## 生徒対象調査

**大学進学希望を持っている生徒は、探究回避が低減する傾向が観測された**  
**\* 小規模校では大規模校を上回る変化幅が観測された**

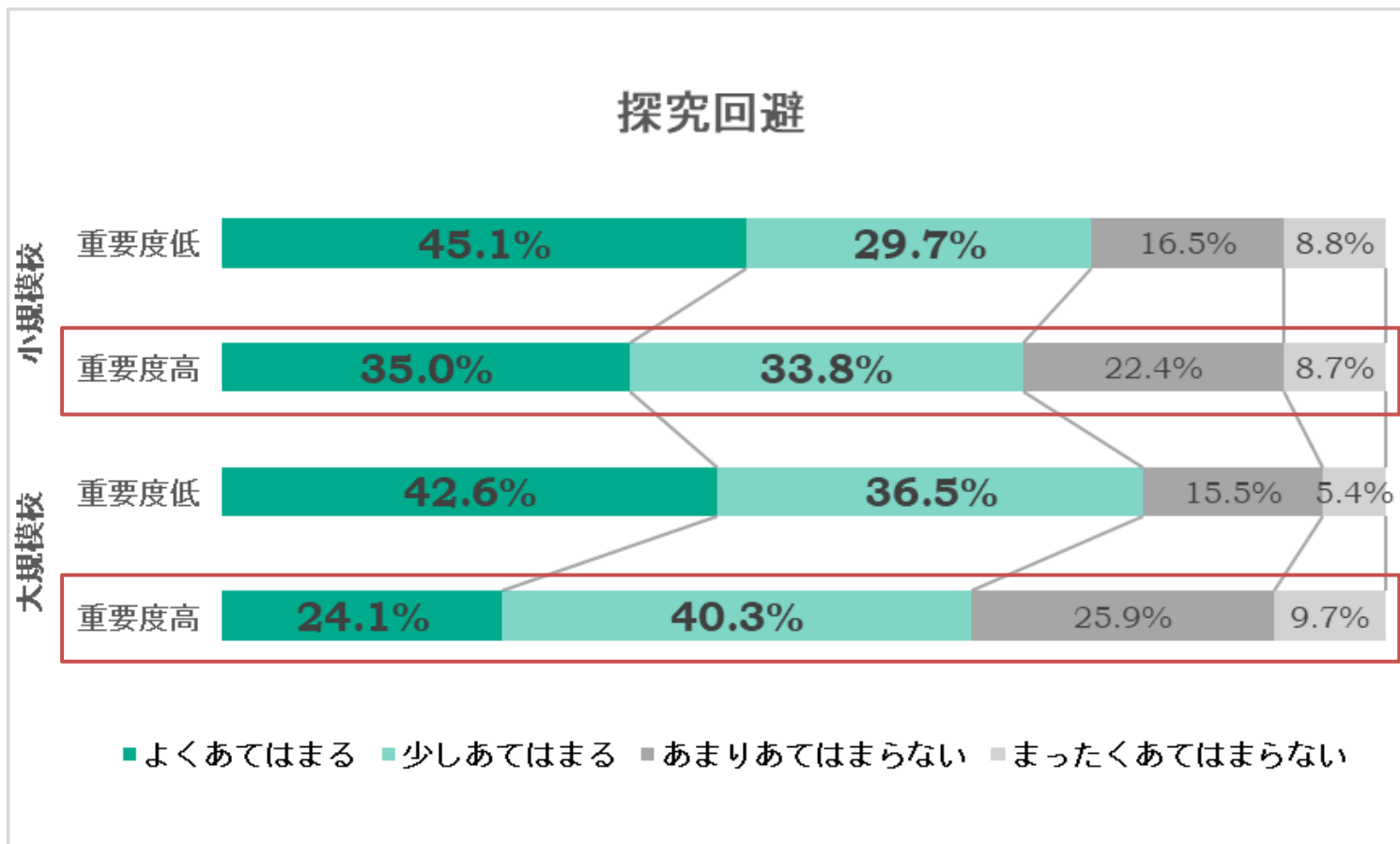


### 【探究回避】

- 探究の学習は苦手である
- 正解が一つとは限らない探究学習は苦手である
- テストや受験に関係ない探究の学習はできるだけしたくない

## 生徒対象調査

「探究活動における支援者が重要である」と感じている生徒は、探究回避が低減する傾向が観測された（小規模校・大規模校共通）



### 【探究回避】

- 探究の学習は苦手である
- 正解が一つとは限らない探究学習は苦手である
- テストや受験に関係ない探究の学習はできるだけしたくない

## 教員向け調査

生徒の意欲やスキルに関する設問（右記）にのみ、大規模校＞小規模校の有意差が見られた

- 探究活動に対する意欲・スキルに関する課題
- ・探究に必要な生徒の知識・技術が不足している
- ・熱心な生徒とそうでない生徒の差が大きい
- ・生徒が主体的に取り組むことができない

教員側の課題意識には、学校規模による有意差は観測されなかった

